

北海道八雲における侯爵徳川義親とその周辺

藤田英昭

はじめに

一 徳川義親の初八雲―明治四二年―

二 大正・昭和戦前期の徳川義親と八雲

(一) 来場時期と滞雲日数

(二) 義親以外の来場者

①―ア 親族(米子・松平家・子女・男爵家)

イ 友人(吉岡信敬・石川三四郎)

② 研究所員・助手(林政史研究室・生物学研究所)

③―ア 大正期の来客(北白川宮・竹田宮)

イ 昭和期の来客(吉田茂・松井石根)

④ 義親の学生(学習院・女学生・啓明寮生)

三 八雲における活動の諸相

(一) 熊狩の意味

(二) 講演会とその目的・影響

(三) 水上大運動会と相撲観戦

北海道八雲における侯爵徳川義親とその周辺

(四) 雪おくりと郷土芸術・創造力
おわりに

はじめに

北海道二海郡八雲町末広町にある八雲町公民館の敷地内には、現在「徳川さん」と命名された胸像が建っている(図1)。建立されたのは、昭和四一年(一九六六)一〇月五日、胸像の主は尾張徳川家十九代当主にして、戦前は侯爵であった徳川義親である。胸像裏面には、以下のように刻まれている。

徳川義親さんは、先考慶勝卿義禮卿の遺志を継ぎ、半世紀余終始易らぬ愛情をもつて、この町を育てられた。今年創業八十八年 徳川さん八十歳の誕生の日に深い感謝と喜びと将来への夢をいだいて、この像を建てる。

昭和四十一年十月五日

徳川さんを顕彰する会

これによると、この像は、尾張徳川家による八雲開墾から八八年目、さらには義親の傘寿の誕生日に建立されたことがわかる。周知のように、八雲開墾は、尾張家十七代徳川慶勝によって明治十一年（一八七八）に「創業」され、十八代徳川義禮が「継承」、そして十九代義親の時に、華族農場である徳川農場が創設され、「発展」してきた歴史を持つ。^① 義親は、「愛情」をもって八雲（大正八年（一九一九）町制施行）を育ててきたという。像を建てた「徳川さんを顕彰する会」とは、八雲移住人の旧藩士族やその子孫たちで構成された「和合会」^②を含む八雲町有志の会である。

注目したいのは、彼らが義親のことを「徳川さん」と、ある意味「気安く」呼んでいることである。もとより江戸時代以来の君臣関係はすでになく、和合会員たちは義親に仕える立場ではなかったが、義親はかつての主筋にあたる人物である。華族制度も解体されて久しい昭和四〇年代ともなれば、「侯爵様」と称するのもそぐわなかったであろう（戦前は「侯爵様」と呼ばれていた）。それでも、尾張徳川家の当主であれば、慶勝・義禮のように、敬称をつけて「義親卿」とする選択肢もないわけではなかった。しかし、昭和四十一年当時、いまだ健在であった義親に対して、「卿」を付すのはどこかよそよそしい感じを与えたのであろう。町をあげて普段から呼びならわしていた「徳川さん」と命名したのであった。義親と町民との関係が上下関係ではなく、かなり近しい間柄であったことを彷彿とさせる呼び名である（ちなみに、義親はこの年八月に八雲町より名誉町民第一号の称号を贈与されていた）。

本稿は、戦後の八雲町民から「徳川さん」と呼ばれた徳川義親と八雲町との関係を、侯爵時代の大正・昭和戦前期にさかのぼって具体的に跡付けようとするものである。もともと、双方の関係は、すでに義親の自伝や回



図1 「徳川さん」胸像

想録等でよく知られた事柄ではある。例えば、義親は八雲について、次のように語っている。

「此町は、明治十一年、祖父（慶勝）が旧尾張藩士を移住させて開いた地である（中略）生立ちが斯如くだから、此町全体は祖父以来私の所有と心得てゐる」^③。

「八雲を育てるのが私の責任であり、また祖父の遺志でもある」^④。

「私は、毎年八雲に行つて（徳川）農場だけでなく、八雲村の世話をした。（中略）私はそこで、一般の農民の生活ぶりをまのあたりに見たが、その貧しさには驚かされた。私は移住民ばかりでなく、すべての農民の生活を向上させなければいけないと思つた」^⑤。

義親にいわせれば、八雲は養祖父慶勝の命によって旧尾張藩士が開いた土地であるがゆえに、当主である自身の「所有」の地であり、「責任」を

持たなければならぬところであった。したがって、「移住民」である旧藩士族に対してだけではなく、八雲に暮らす全ての人びとの生活を向上させたいと強く意識する土地でもあったのである。こうした自覚を持っていた義親が、八雲に何をもちたのか。その具体的な数々については、自身の回想録の他にも、すでに『八雲町史』『和合会史』等で取りあげられている。⁽⁶⁾

本稿では、これまでほとんど知られていなかった明治四二年における義親の初八雲の記録を紹介し、来場時の実態を検討するとともに、大正以降は徳川農場の「日誌」⁽⁷⁾を基本史料としながら、八雲における義親の行動や人びととの交流を具体的に明らかにしていきたい。明治四二年の記録や「日誌」からは、義親自身が語ってこなかった八雲滞在中の活動が、農場員の視点によって明らかになるであろう。もっとも、義親が八雲について思考を巡らすのは、何も滞雲中だけとは限らない。東京に居ながら、農場の経営方針や八雲の将来を構想することもあったに違いないが、本稿では八雲滞在中の義親の行動にこだわって分析していきたい。

加えて、本稿で注目したいのは、義親に随行・同行して八雲にやって来た多様な人びとである。こうした人びとは、これまでも義親の回想録等で触れられる機会もあったが、総体として捉えられたことはなかったように思う。彼らにとって八雲とはどのような土地であったのか。また、義親は彼らをどのように八雲に迎えたのか。義親との関係を踏まえながら跡付けていくことも目的とする。

以上を通じて、大正・昭和戦前期における義親と八雲との関係を俯瞰していきたい。

一 徳川義親の初八雲―明治四二年―

徳川義親が、先代義禮の逝去を受けて侯爵を襲爵したのは、明治四一年（一九〇八）六月であった。翌四二年七月、「うちの農場もある事だから」として、義親は北海道旅行に出掛け、初めて八雲を訪れた。⁽⁸⁾実をいうと、義親は尾張徳川家の養子になる以前、学習院高等科一年の明治三八年七月から九月にかけて、同窓生らと北海道・択捉島を旅したことがあった。⁽⁹⁾しかし、この時の旅行では八雲を訪れてはいなかった。したがって、八雲を訪れたのは明治四二年が初となる。

大正以降の活動を明らかにする前に、まずは明治四二年七月初八雲について取りあげよう。

義親の紀行文によると、「七月一日に花の都を出発して、蝦夷についたのが三日の早朝。農場は八雲（胆振国）に壹千万坪に近い程ある。八雲に十日まで居た、其内には農場をまはつてる時に、馬にひつかけて海に投げ込まれか、つたり、アイヌをつれて鱒漁に行つたり、競馬や、打球を催したり中々面白かつたが、此事は省いて」⁽¹⁰⁾と記述され、八雲での様子がほとんど語られないまま、そのあとの北海道各地の紀行文が詳細に綴られていく。八雲では、馬で農場を巡回していたときに振り落とされそうになったこと、アイヌとの鱒漁、競馬や打球など、後述する大正期以降の滞雲と共通する行動もあつて興味深いのだが、いかんせん義親の紀行文からは詳細を知りえないのである。明治四二年度の農場「日誌」⁽¹¹⁾にも、義親滞雲中の記事はなく、来場日と帰京日がわかるぐらいである。

ただし、のちに徳川農場となる「徳川開墾地」職員が、東京家職宛てに

送った書簡草稿中にこの時の義親の行動が記されており、ここに七月三日から一日までの来場中の様子が日付ごとにとまめられているのである。⁽¹²⁾年代の記載はないが、内容から見て明治四二年当時のものと見て間違いない。この書簡に記された日次記から、義親の行動をまとめると以下のようになる。

- 七月三日 午前九時一五分八雲停車場着、真萩館に入る
 - 四日 八雲神社参詣、移住人の開墾・農業経営状況視察
 - 五日 八雲小学校参観、鶯ノ巣開墾地視察、アイヌ部落御覧
 - 六日 移住人所有優等馬御覧、園遊会
 - 七日 遊楽部川で鱒狩
 - 八日 野田生小作人視察、八雲神社馬場で打球
 - 九日 鮭魚蕃殖孵化場視察
 - 一〇日 移住人高齢者へ御肴料下賜、競馬御覧
 - 一日 午前九時一五分八雲停車場出立、俱知安へ向かう
- 義親の御供は、家令海部昂蔵と家従五味末吉、函館からは開墾地委員（総監督）を務める家従杉立正義も随行して、七月三日に八雲停車場に降り立った。⁽¹³⁾移住人（旧藩士族）一同が出迎えるなか、折しも雨が降り出し、歩行困難になったが、八雲小学校五年生以上の生徒も出迎えに来たという。義親は騎馬で開墾地内の真萩館に到着、移住人一同がここで義親に拝謁した。真萩館は明治二十一年に開設された開墾地内の貴賓館で、八雲における徳川家の別邸でもあった。後に見るように、移住人の会合に利用されたり、講演会が開催されたりもした。義親はここを宿舎とし、大正以降もそれを通例とした。

四日、午前中は真萩館に在館し、午後から「御馬」で出館して八雲神社

に参詣した。八雲神社は、移住人の精神的な拠り所として、熱田神宮の御霊代を勧請した国内唯一の神社である。神社境内には、明治二六年以来、養祖父徳川慶勝の分霊も鎮座している。この時は、移住人にして神官の森富崇が、「頗フル丁重」に神事を務めた。参拝後は、引き続き馬で移住人の開墾・農業経営状況の視察に向かった。「農村ノ最奥」まで達した後、馬を返して「噴火湾（内浦湾）の絶景を眼下に見下ろし戻っていった。その後、常丹牧場に赴き牧草畑を見て、牧草の中に紅白のクローバーが「紅白ノ玉ヲ散シタルカ如キ美観アリ」として、携帯した「写真機」で写真三枚の「御撮影」に及んでいる。そのまま牧草畑を横断して坊主山に至り、畑中の細道を通って、移住人宅前を過ぎるなどして「国道」（現・国道5号）に出た。道の両側には甘草の花が盛りで、「夕陽ニ映シテ一層美ヲ増シタルヲ賞シ」つつ、八雲市街地を巡見して午後六時に帰館した。なお、八雲まで随行した海部家令は、昨晩から体調不良で「終日臥床」しており、この日は五味家従と北海道詰めの家従大島鍛が御供を務めている。

五日は、午前中に八雲小学校や村役場を訪れた後、午後二時頃から鶯ノ巣開墾地（現・立岩）ほか所有地を巡見した。鶯ノ巣は、かつて移住人の子弟や独身移住人による共同経営農場があったところで、大型の西洋農機具を導入して移住人を支援するなど、初期の開墾事業に貢献したことで知られている。のちに幼年舎・青年舎も設置され、ここからのちの八雲の行政・産業を担う多くの人材が輩出された。⁽¹⁴⁾義親の御供を務める大島鍛（のちの徳川農場長）も青年舎の出身であった。⁽¹⁵⁾鶯ノ巣のあとは立岩の樋田惣助宅で四才種牡馬の「御騎乗」を試み、「大ニ歓ヲ尽シテ」いる。なお、義親の「御乗馬」は濠州産の牡馬で、樋田より借り入れたものという記載もある。⁽¹⁶⁾その後、市街から遊楽部海岸に出て、「アイヌ（アイヌ）ノ部落及熊ノ頭

骨ノ垣ヲ御撮影」し、さらにアイヌが養育する熊の子を「御覧」になった。この時撮影した写真が図2である。「熊ノ頭骨ノ垣」は、アイヌの熊祭(熊送りとも)の痕跡であろうか。⁽¹⁷⁾この光景を見た義親が、何を思ったのか記述はないが、後年来雲した義親は、しばしば熊祭に参加し、アイヌの人びとと交流を深めることとなる。この日も午後六時に帰館した。一方、翌六日の園遊会の用意として、開墾地職員は移住人の吉田知一らに売店設置などの準備を依頼するとともに、移住人六九名と官民首脳の三九名に招待状を発送した。

六日の義親は、午後の園遊会に先立って、産牛馬組合事務所前で移住人所有の優良馬を「御覧」になり、ここでも写真二、三枚を撮影している。



図2 アイヌの家と熊の頭骨
徳川義親「たびだち」(『明倫』15号)より

この日、ようやく海部家令の体調が快復した。午後一時、園遊会が開会すると、招待の来賓が続々と参会し、⁽¹⁸⁾開墾地庭内に設置された氷サイダー、茶菓、汁粉の模擬店で各自飲食が始まった。義親が来賓に挨拶を述べると、村長の木村定五郎がそれに応じて答辞を述べた。折詰や酒も振る舞われるなか、八雲小学校生徒の音楽隊が絶えることなく楽曲を演奏し、興を添えていたという。各模擬店も大いに繁昌し、来賓も頗る満足の様子

で、十分に歓を尽くして六時頃散会している。

園遊会の疲れもなく、翌七日は遊楽部川(現・トワルベツ川)を遡って鉛川の落とし口で鱒狩に及んだ。アイヌ五名を雇い、移住人数十名が御供しての行動で、投網の結果、鱒一〇尾を漁獲した。ここで直ぐに火を焚いて鱒を料理し、昼食には焼き魚を賞味している。義親は大切れ一切れを全て平らげたという。その後、別の場所で投網するも漁獲はなく、午後四時頃帰途について六時に帰館した。帰館後、義親は漁夫に雇ったアイヌを真萩館玄関前の芝生に招待し、酒食を振る舞った。アイヌも歌舞を披露して大いに盛り上がっている。

八日は、野田生の小作人開墾地の視察に向向いた。徳川家開墾地による小作人募集は明治二一年に始まり、その後続々と小作人が野田生に入植していったが、その多くは尾張国東春日井郡出身者で、同地は「小尾張」の観を呈していたといわれる。風習・慣例が同じであったため結束力が強く、産業組合や青年会も結成されるなど、「小作人ノ模範」とされた土地でもあった。⁽¹⁹⁾杉立正義・大島鍛の案内で野田生停車場に到着すると、一〇〇名計りの小作人が出迎えた。義親は酒肴料金二〇円を小作人らに与えた。その後、「御馬」で南野田生元牧場の高台に上って農場全部を見渡し、帰途についた。この最中にハブニングが出来する。「侯爵様ノ御乗馬俄然カケ出し、容易ニ止マルベクモ非ズ、見ル間ニ飛ヒ去ツテ、御姿モ見ヘズナレリ、皆大ニ驚ク、此時小作人ノ案内河原友二ノ倅、馬ヲ馳テ御跡ヲ逐ヒシガ、御馬ハ野田生海浜ニテ止マリシ由ニテ、幸ニ御無事ナルヲ得テ、一同大ニ安堵セリ」。これこそ義親が記していた「農場をまはつてゐる時に、馬にひつかけて海に投げこまれか、つた」エピソードに相当しよう。ここで登場する河原友二(図3)は村会議員で、野田生小作人の子弟に向けた

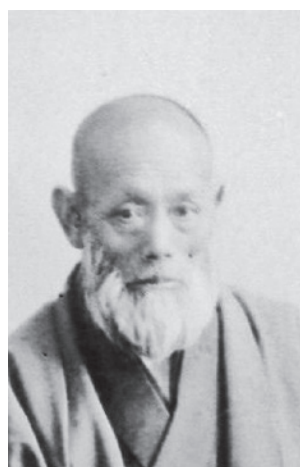


図3 河原友二
(八雲写真741)

簡易教育所の設立(明治三年)に尽力した人物で、その「悴」は寿太郎と思われる。⁽²⁰⁾この簡易教育所がのちに野田生小学校になる。⁽²¹⁾義親は、この教育所側の長屋商店で昼食を取った。⁽²²⁾食後は小作人鈴木重助が、自宅裏手の馬場で小作人所有の良馬を集めて競争させるなどして歓待し、義親も喜んでいる。午後二時の汽車で八雲に戻った後も、馬との戯れは続き、八雲神社境内の馬場では、移住人が開催した打球会に参戦、「競技数回快ヲ極メ、御自身ニモ二回競技ニ御加入アリ、二回トモ御負ケニナリタルモ、頗フル御愉快ノ様ニ相察セラレタリ」であつたという。最後は「余興ノ徒歩競争」をして帰館した。

九日は、午前九時から遊楽部川支流セイヨウベツ川沿いにある鮭魚蕃殖組合の孵化場に向いた。御供は五味家従と岡野隆磨・川口良昌・林熊之助の移住人である。岡野は鮭魚蕃殖組合の理事を務めていた。移住人の入植当初、周辺住民による鮭の乱獲防止のため、当時の徳川家開墾試験場は、開拓使函館支庁より鮭の天然種殖蕃殖事業を委嘱されていたのだが、この時すでに徳川家の専属事業ではなく、村民有志の共同による組合組織に委ねられていた(昭和九年「一九三四」には道庁に移管)。⁽²⁴⁾大正期以降、義親はこのセイヨウベツの孵化場を本拠として、熊狩を挙行することになる。

一日は、移住人との交流に終始している。午前中は、九時に移住人のうち七〇才以上の高齢者を真萩館へ招待して、各五〇〇正ずつ御肴料を下賜した。対象の高齢者は、杉立正憲(八〇才)・岡野頼(七八才)・角田弘業(七六才)・角田弟彦(七〇才)・森富崇(七二才)・森八十八(七二才)・細川平三郎(七二才)・吉田八郎(七二才)・馬場逸学(七二才)・梅村多蔵(七〇才)の計一〇名であつた。このことから、八雲開墾に従事した移住人とは、厳密に言えば当主(ないし隠居)を指し、妻や子供たちは移住人の家族という位置づけであつたことも判明する。午後は、一時から移住人が開催した競馬会を観戦し、優勝馬二頭に賞金を与えた。この日は二〇〇〇人程の観戦者があつたというから「頗フル盛況」であつた。夜は滞在中に世話になった角田弟彦・永田健・岡野隆磨・吉田知一・川口良昌・太田半三郎・伊藤直太郎に酒肴を下賜してねぎらつた。

一日は八雲出立の日である。義親は、午前九時一五分迄の列車で倶知安に向かった。八雲停車場には、八雲小学校全生徒や移住人のほか、村長など官民から一〇〇名が見送りに来た。義親には、五味家従と大島家従の二人が随行し、海部家令は札幌に予定があるため、俱知安までの同行であつた。その後、義親一行は羊蹄山、洞爺湖、室蘭、苫小牧、支笏湖など北海道各地を巡って、七月二十九日に札幌に到着、「くたびれたから日記は今日で止める」として、義親の紀行文「たびだち」は札幌で終了している。ただし、旅程はもう少し続き、札幌から小樽を経て、再び七月三十一日午前五時に八雲に到着した。この時、大島鍛に代わり杉立正義が随行して、徳川家が経営している函館の大野農場に向かうのである。⁽²⁵⁾ここにはもと七重勸業試験場附属の養蚕所があつたが、明治二十年、徳川家は官に願ひ出て養蚕所の払い下げを受け、同所にマツ・スギ・ヒノキなどを植

樹して山林事業を進めていたところであつた。⁽²⁶⁾大野を実見し終えた義親は帰途につき、八月三日午後三時一五分に上野停車場に到着し、北海道紀行はここに終了するのである。およそ一か月の旅路であつた。

以上、明治四二年の滞雲中における義親の行程をやや詳しく見てきた。

当時の義親は、疲れ知らずの二三歳、休む間もなく連日多くの人々と交流し、開墾地内を馬で闊歩していった。大正期以降八雲を訪れた際も、原則として馬と行動をともにしていくが、昭和五年（一九三〇）の来場時には、初めて八雲で自動車に乗っている。八雲での初体験は、義親の脳裏にしっかりと刻印されたことは疑いない。農場視察や鱒狩、アイヌや移住民との交流（これは熊狩や和合会への臨席となる）等は、その後の八雲での行動形態の基本となった。そのうえで、後に見るように、義親の立場や時期的な要因も重なって、八雲における義親の行動パターンが多様化していくことになる。

二 大正・昭和戦前期の徳川義親と八雲

ここからは、大正・昭和戦前期における徳川義親が、八雲でいかなる活動をしていったか、概観していく。

この当時の八雲の状況としては、明治四五年（一九一二）に、徳川家が全移住人七五戸に九二四町歩の土地を譲渡したことで、明治一年から続く開墾事業が一段落した時期に相当していた。徳川家はその残地をもつて「徳川農場」の経営に着手しはじめた。自作農となった移住人は、大正四年（一九一五）に徳川家への報恩と移住人の親睦和合を目的とした「和合会」を結成している。一方、義親の境遇にも変化が生じていた。まず、明治四二年に十八代義禮の長女・米子と結婚する。そして、同四四年に東京帝国

大学文科大学史学科を卒業し、同年、同大学理科大学植物学科に入学。大正三年には植物学科を卒業し、麻布区富士見町（現・東京都港区）の自邸内に植物学の実験室（のちの徳川生物学研究所）を開設する。大正四年には、史学科の卒業論文『木曾山』を上梓するに至る。

大正に入って、義親はまず、同四年夏に八雲を訪れる予定であつた。しかし、「御病氣」のため来場が延期され、農場員一同が残念に思い、「失望」したことがあつた。⁽²⁷⁾

この時、義親の代理で来場したのが、義親の植物学研究を補佐していた都築省三であつた。都築は、八雲移住人の一人都築貞寿の息子で、八雲開墾の軌跡やエピソードをまとめた『村の創業』（実業之日本社、一九一七年）を著した人物である。この年八月八日に来場し、二〇日まで八雲に滞在して、義親に代わって馬鈴薯疫病の研究に従事した（大正四・八・八）。⁽²⁸⁾当時八雲では、天候の影響もあって「馬鈴薯疫病」が流行し、八雲本村や砂蘭部国道付近より奥にむけて、大きな被害を受けていたという（大正五・七・二三）。⁽²⁹⁾

この間の八月一〇日、都築は農場長の大島鍛とともに、初期の移住人である角田弟彦を訪問している。当時、弟彦は七六歳、生活難のため妻と嗣子は遠く他郷に転じ、自身は孫と暮らしていたが、老衰のため眼病におちいつていた。これに同情した義親が、御手許金一五円を弟彦に下賜することと、都築が伝達に訪れたのである。弟彦は感泣して受容し、大島に保管を依頼した（同・八・一〇）。⁽³⁰⁾

大正五年も義親の来場はなかったが、翌六年夏以降は、妻米子とともに旧婚旅行を兼ねて欧州旅行に向向いた大正一一年を除いて、昭和一六年（一九四一）夏まで、連続して計四六回八雲を訪れている。三一歳から五五

講演会	競技大会	農民美術	和合会	記念祭	園遊会	その他
				開墾記念祭		常丹墓地、移住人高齢者と記念撮影、相撲観戦、大沼公園から大野農場へ
					熊狩祝宴	
青年演説会				開拓記念碑	月見・晩餐会	小樽へ出発、アイヌと交流
						北千島視察後に立寄、アイヌと交流
真萩講演会	水上大運動会			霊祭・忠魂祭	慰労の宴	相撲観戦
					熊狩慰労会	遊楽座活動写真
猛獣狩談						北白川宮と小樽へ行く
欧州漫遊談						農場優良農家表彰式臨席
欧州漫遊談						
石川・吉岡・井上秀					労働学生晩餐	労働学生と交流、競馬会、野球観戦、駒ヶ岳・羊蹄山登山、遊楽座活動写真、関東大震災
中学校		品評会				農村美術工芸品評会
中学校						
中学校						八雲中学校で撃剣・柔道御覧、八雲座でラジオ・演奏会
国民学校						農村美術工芸品陳列会
						砂蘭部岳など登山、市街散策
			青年和合会			市街散策、大沼遊覧、八雲座で活動写真御覧、尚武会剣道大会
				五十年祭相談		八雲座で活動写真
				五十年祭		八雲座で熊狩実況活動写真会、野田追農業倉庫落成式
						函館聾啞学校・図書館参観、市街撮影

表1 八雲における徳川義親の活動(大正6年～昭和16年)

番号	和暦 (西暦)	期間(日数)	おもな来場者	熊狩	川狩(釣)	農場視察	国民学校
1	大正6年 (1917)						
		7月23日～8月5日(15日)	毛利男爵令息・堀鉞之丞・都築省三				
2	大正7年 (1918)	3月11日～25日(15日)	柳田一郎・都築省三・岡本一平(朝日新聞)・河合裸石(小樽新聞)	○			
3		8月6日～9月3日(32日)	米子・五味末吉				
4	大正8年 (1919)	3月21日～31日(11日)	吉井信照・小笠原・細川三佐雄(小樽新聞)				
5		9月1日～10日(10日)	米子・松平節子・松平康信ほか12名				
6	大正9年 (1920)	3月17日～28日(12日)	松平康邦	○			
7		7月17日～8月5日(20日)	米子・松平銀子				
8	大正10年 (1921)	3月13日～24日(12日)	一行4名・学習院学生4名(5名とも)	○			
9		8月14日～29日(16日)	米子・五郎太・北白川宮成久王				
	大正11年 (1922)	(夫妻で欧州旅行のため来場なし)					
10	大正12年 (1923)	2月26日～3月5日(8日)		大雪中止			
11		3月19日～27日(9日)		○			
12		8月4日～9月1日(29日)	米子・石川三四郎・吉岡信敬・阪本鈺之助ほか			農具庫建築工事	
13	大正13年 (1924)	3月16日～29日(14日)	吉岡信敬			模範家屋	演芸会
		(8月6日～14日 徳川義寛・津軽義孝滞在 8月18日～29日 五郎太滞在)					
14	大正14年 (1925)	3月31日～4月11日(12日)	吉岡信敬	○			
15		7月16日～31日(16日)	北白川宮永久王・竹田宮恒徳王・吉岡信敬				
16	大正15年 (1926)	3月18日～30日(13日)	吉岡信敬・泉谷祐勝・若宮(小樽新聞)	○			
17	昭和2年 (1927)	3月28日～4月12日(16日)	五郎太(3/23~4/4)				
18		8月8日～9月7日(31日)	川合徳太郎(林)・大町文衛(生)				
19	昭和3年 (1928)	3月21日～4月5日(16日)	泉谷祐勝・川合徳太郎	○			
20		8月6日～29日(24日)	米子・子女・徳川義恕・五味末吉・石川三四郎			ドロの家	
21	昭和4年 (1929)	3月22日～31日(10日)					
		(太平洋学術会議出席のため東南アジア視察旅行)					

講演会	競技大会	農民美術	和合会	記念祭	園遊会	その他
						中学校・和合会・軍人会館で南洋活動写真映写
						自動車、大新乳牛能力品評会、灯籠流し、八雲聾啞学院新築落成式、洞爺湖から札幌へ
中学校					名士招待	開墾記念碑建立問い合わせ、八雲聾啞学院、競馬
						大日本乳製品工場見学、先住民族遺跡見学・採集
4回(虎狩他)						フィッシュミール工場
				開墾記念碑		聾啞学院、酒田へ行く
	武道大会		昔語り			
婦人労働服						服部味噌醸造場、八雲座で活動写真、慶勝筆「学習館」、十和田湖に立ち寄り帰京
	武道大会					鮭採卵場、八雲聾啞学院、蟹缶詰工場、仙台北立ち寄り帰京
						明治製菓八雲乳工場、製酪聯合会工場、函館大火の見舞い後帰京
				開墾記念祭		八雲座で活動写真、八雲聾啞学院講演会、大沼見物後帰京
中学校						大島文庫座談会に臨席
						明治製菓株式会社八雲製乳工場・製酪工場、義知は活動写真撮影、室蘭に旅行
雪おくり	武道大会					雪おくり
						八雲神社祭礼、庭内伐木運動、札幌のパチエラーを訪問し植物園に行く
	武道大会					酪農経営合理化運動青年委員講習会演説、八雲自治三十年記念祝宴臨席、アイヌ2人と帰京
						室蘭・小樽・札幌に行く(聾教育講演)、パチエラー訪問、常丹墓地、味噌工場・澱粉工場、日高旅行
	武道大会					室蘭の聾啞学院開院式に臨席
実科高女ほか				六十年祭		自作農創設記念祭、パチエラー訪問
	武道大会					附近風景撮影、雪おくり
				開墾記念祭		乳牛感謝、室蘭聾啞学校昇格記念式参列
	武道会					国民学校出身戦没軍人追悼会
						室蘭聾啞学校感謝実演会臨席、常丹墓地参詣
中学校	武道会					八雲座で映画
礼法						庭内散策・樹木枝切り、常丹墓地墓参、登別温泉に静養、女子学生の勤労奉仕作業相談

番号	和暦 (西暦)	期間(日数)	おもな来場者	熊狩	川狩(釣)	農場視察	国民学校
22	昭和5年 (1930)	3月14日～29日(16日)	春子・義龍	○			
23		8月4日～14日(11日)	大町文衛(生)・岡田満ら			野田生山林	
24	昭和6年 (1931)	6月5日～9日(5日)					
25		7月30日～8月6日(8日)	稲荷山資生(生)				
26	昭和7年 (1932)	2月26日～3月4日(8日)				農場経営	
27		7月24日～30日(7日)	平山重勝(生)			農場経営	
28	昭和8年 (1933)	3月18日～31日(14日)					
29		7月25日～8月3日(10日)	田宮博(生)				
30	昭和9年 (1934)	1月16日～20日(5日)					
31		4月14日～22日(9日)	徳川義龍				
32		7月26日～8月6日(12日)	大炊御門経輝(7/16～8/6)・林政史所員・田中親美・森川勘一郎				
33	昭和10年 (1935)	3月11日～23日(13日)	徳川義龍				
34		7月15日～29日(15日)	徳川義知・吉田茂・和子・湯浅明(生)・服部廣太郎(生)・三宅正太郎		ユウラップ 農場		校歌指導
35	昭和11年 (1936)	3月11日～23日(13日)	奥貫一男(生)				
36		7月26日～8月5日(11日)	毛利文枝(林)				
37	昭和12年 (1937)	3月19日～4月2日(15日)					
38		8月7日～16日(10日)	山口清三郎(生)・桜菊女学園				
39	昭和13年 (1938)	3月27日～4月5日(10日)	ドイツ人2人				
40		8月3日～10日(8日)	松井石根・大川周明ほか				
41	昭和14年 (1939)	3月23日～4月3日(12日)		○			
42		7月28日～8月4日(8日)	山脇高等女学校				
43	昭和15年 (1940)	3月21日～24日(4日)	啓明寮生				
44		7月22日～29日(8日)	山脇高等女学校・鈴木喜久雄				校旗授与式
45	昭和16年 (1941)	3月6日～12日(7日)	鯨岡禮津子(林)・野口百合子(生)				
46		8月2日～11日(10日)	宮本朝男(生)・浜中たま子(林)・啓明寮生			大新研究会	

徳川農場「日誌」(八雲334～358)より作成。網かけは義親が活動したことを示す。

歳までの二四年間に相当する。先代義親の八雲訪問回数が、生涯で全四回だったことを踏まえると（慶勝は一度も訪れていない）、義親の来場回数は群を抜いている。

表1は、八雲滞在中の義親の活動を示したものである。以下、この表に基づきながら滞雲中の概要をまとめてみよう。

（一） 来場時期と滞雲日数

先にも示したように、義親は大正六年から昭和一六年までの二四年間で、八雲を全四六回訪れた（以下、文中【 】内に数字を示した場合は、表1の番号である）。

表1によれば、一年間のうち原則二回八雲を訪れ、時期は二月（三月（四月含む）の冬春期と、七月（八月（六月含む）の夏期であったことがわかる（そのうち大正二年・昭和九年は三回、大正六年・一三年・一五年、昭和四年は各一回ずつであった）。昭和六年は、春・夏の来場ではなく六月・八月の来場である。六月に八雲を訪れたのは、この時だけであったが【24】、これはおもに競馬観戦のためであったと想定される。明治四四年（一九一一）に開催されていた八雲競馬は、昭和六年（一九三二）一月に地方競馬と公認され、この年六月は公認後初めての競馬開催であった。³¹⁾

滞在日数が最長であったのは大正七年夏【3】の三二日間、ついで昭和二年夏【18】の三一日間である。大正七年は八月に立岩遊園地で開拓記念碑の除幕式が挙行され、義親夫妻も臨席している。昭和二年は翌三年の開墾五十年祭を控えた年で、和合会等からその相談も受けていたが、記念祭の準備だけではなく大沼公園に足を延ばすなどして避暑を楽しんだ。最短

は昭和一五年春【43】の四日間で、年を重ねた昭和期以降、少しずつ滞在日数が少なくなる傾向が認められる。昭和一〇年代は、加齢のためかどこへも出掛けず、農場庭園内を散策したり、運動代わりに樹木を伐ったりすることも見られた（昭和一一・七・二八、同一六・八・三）。

東京と八雲を往復するだけではなく、八雲から函館、さらには東北各地に足を延ばして帰京したり【1】【27】【29】【30】【31】【32】、滞雲中に道内で登山をし、函館・小樽・室蘭・札幌などを訪れることもしばしばであった【3】【9】【12】【17】【21】【23】【34】【36】【38】【39】【40】【42】【44】。大正八年九月【5】、三二歳の義親は、親族・友人らと北千島列島を視察した後に八雲を訪れるなど、体力が³²⁾あり余っている様子がうかがえるが、昭和一六年夏【46】の場合、五五歳の義親は、一泊二日で登別温泉に静養に出掛けている。大正八年と昭和一六年は、ともに一〇日間の滞在であったが、年齢による過ごし方の違いが明瞭である。

大きな出来事としては大正一二年夏【12】で、九月一日に夫妻で八雲を発ったが、その日はまさに関東大震災が起こった当日であった。夫妻は仙台のホテルに足止めとなるも（大正一一・九・二）、三日に妻米子を仙台に残して義親のみ東京に向け出立、この時、歌舞伎座の巡業に出ていた二代目市川猿之助、二代目市川松蔭、四代目市川市蔵らも仙台におり、ともに東京に強行したという。³³⁾ 米子は九月一二日に再び八雲に戻り、一六日には米子の思召しで、農場員一同が「東京震災ノ活動写真」を観覧した（大正一二・九・一六）。米子が帰京したのは九月二六日であった。

表1に戻ろう。二四年間の八雲滞在日数を数えると、全五九〇日であった。そのうち、冬春期は全二七四日で平均一一日間、夏期は全三二六日で平均一四日間の滞在であり、夏期のほうが若干滞在期間が長いことが判明

した。表1を見るとわかるとおり、冬春期は熊狩、夏期は鱒狩などの川狩（釣）を行うことが定番化しており、義親は、江戸時代の領主が領内視察を兼ねて鷹狩をするのかのとき感覚で八雲を訪れ、狩猟・漁獵を楽しんでいた。改めて、八雲が義親自身の「所有」地であることを裏付ける行動である。このことは、裏を返せば、明治十一年の「創業」から半世紀を迎えつつある八雲が、産業振興や市街地整備の進展が著しいだけではなく、当主の遊興地としても充実してきたことを示している。

（二） 義親以外の来場者

ここでは義親に同行・随行して八雲に来たり、義親滞在中に八雲を訪れた来場者に注目する。表1によると、大正から昭和戦前期の来場者は、義親に随行した家職（家令堀鉞之丞、家扶五味末吉ら）を除いた、①義親の親族や友人、②主宰した研究所の所員・助手、③義親の政治的・社会的活動に係わって接点があった人びと（来客）、④義親が指導した学生、におよそまとめることができる（ちなみに、昭和五年夏【23】に来場した岡田満は歯科医で義親の主治医。義親は来場中も歯痛のため治療することもあった）。

そのうち、①親族・友人の来場は、大正期に頻繁であったことがうかがえ、昭和期に入ると、②研究所の所員や助手が義親に随行して訪れるようになった。③来客も昭和期に入ってからが多いようにみえる。こうした傾向は、義親の年齢・立場とも関係していたのではなかったか。すなわち、三〇歳代の中堅の年齢の大正年間、気が置けない家族や友人たちと避暑を兼ねて、別邸で遊興・交流するための場として八雲が機能していたことを示し、一方、四〇〜五〇歳代の壮年期に入ると、外部の人に八雲

を紹介するという恰好で来場者が相次いだという見方である。四〇歳代以降は、研究所の所員に研究的刺激とともに、慰労の場を提供する主宰者・指導者としての立場もあったに違いない。さらには、幅広い活動を展開していくなかで知り合った知人を接待する場として、八雲が一定の役割を果たしていたと見なすこともできる。そうした意味で義親は、自身の年齢や社会的立場の変化に応じて、八雲との関わり方を自然と変えていったと見ることもできよう。併せて、義親が年を重ねるごとに、八雲もそれに比例して成熟度を増していったと評価することもできる。④学生は、時期的な特徴があるわけではないが、昭和十二年（一九三七）以降、学校単位で女生が訪れていることは目を惹く。

それでは、①②③④について、義親との関係を踏まえながら、彼らが八雲とどのように関わったのか、具体的に見ていこう。

①—**ア 親族** 大正期に来場した親族といえ、妻米子をはじめ、実家の越前松平家の一族が目立っている。徳川農場「日誌」を通観すると、米子は手芸が趣味なのか、アイヌ・イコトルの妻フツチャリを真萩館に招いて、アイヌの「模様繕ヒ方」を習ったり（大正七・八・三〇）、昭和初期にはホームスパン（手紡ぎで織った織物）を研究したりしている（昭和三・八・二四など）。大正八年（一九一九）九月【5】に来場した松平節子^{ふしこ}は、慶永五女で義親の姉、津山松平齊民（十一代將軍家齊の一四男）の養女となつて越前松平侯爵家の康莊に嫁いだ。康邦・康信・銀子^{とじこ}は康莊と節子の子女たちで、義親の甥・姪に当たっている。義親の甥といえ、大正六年夏【1】に来場した「毛利男爵令息」もそうである。彼の名は毛利元良、男爵毛利五郎の子息であった。実に元良の母は義親の姉・正子（慶永七女）な



図4 徳川義親(中央)と義龍(右)・春子(左)
(八雲写真77)

のである。義親は一〇歳代の頃、侯爵井上馨が建てた毛利家時習舎に在籍していたことがあり、毛利家とは浅からぬ縁があった。⁽³⁴⁾このように、大正一〇年までは、妻と併せて実家越前家の親族が同行することが多かった。義親自身の子女では、五郎太(長男・昭和六年に義知と改名)、義龍(三男・同七年に大給家養子)、絹子(長女、同年大炊御門経輝に嫁す)・春子(三女、同年西郷吉之助に嫁す)、百合子(三女、同一三年に佐竹義栄に嫁す)が来場している。とりわけ、昭和三年(一九二八)は八雲開墾五十年祭が開催された記念の年で、この年夏【20】家族総出で八雲を訪れたのである。

長男五郎太(義知)の場合、単独で来場することもあったのは(大正一三年、昭和二年春【17】)、嗣子であったことによるものか。昭和一〇年に来場した義知は、附近の風景だけではなく、牛乳の搾乳状況やトラクターでの牧草刈作業、収穫作業を「活動写真」に収めている(昭和一〇・七・一八など)。音楽に造詣が深く楽団も率いていた義知は、父義親が校長を務めた八雲高等国民学校(農業実業学校)の生徒に校歌を指導するなど交流を深めていた(昭和一〇・七・二九)。昭和一三年春【39】に来場したドイツ人二人は、義知の知人であった。

兄弟姉妹のうち、春子と義龍は昭和五年春【22】、義親の熊狩にも同行し、巨熊発見の報を

得ると二人は「殊ノ外歎喜」、馬轡を急いで現場に向かい、巨熊と格闘する義親の勇姿を目撃した(昭和五・三・一九同・三・二〇)(図4)。その義龍は、昭和九年春【31】・一〇年春【33】の熊狩にも同行している。

昭和三年に来場した徳川義恕(慶勝二男)は、男爵家の当主、前述の通り家族総出の開墾五十年祭に合わせた来場であった。義恕の場合、義親の来場とは別に妻子と昭和九年九月にも訪れ、八雲神社を参拝したり、八雲製酪工場を見学、アイヌ部落を視察するなど家族旅行を満喫している(昭和九・九・九同・九・一一)。表1の大正一三年八月に来場した徳川義寛と津軽義孝は、父を義恕とする実の兄弟であった。表には示さなかったが、八月九日には二人の弟義忠も合流し、兄弟三人で八雲の夏を楽しんだ(大正一三・八・九)。

義親の長女絹子が婚嫁した大炊御門経輝は、義親の義理の息子、昭和八年に京都帝国大学理学部を卒業した翌年夏【32】に八雲を訪れた。経輝は七月一六日〜八月六日まで長期間八雲に滞在しているが、彼にとつての八雲は、釣や川狩を楽しむだけではなく、学究調査活動の場でもあった。のちに地質学者・古生物学者として名をはせる経輝は、自動車でボンセイヨウベツ川やサツクルベツ川、無弓部(テユベ)貝塚などに出向いて、貝の化石採集に及んでいる(昭和九・七・二〇など)。調査の成果は、翌一〇年に「北海道胆振国山越郡ボンセイヨウベツ及び夏路の瀬棚統貝化石に就いて」という論文で発表され、八雲周辺の瀬棚層研究の基礎的文献となった。

①—イ友人 義親の友人では、吉岡信敬と石川三四郎を特にあげたい。⁽³⁷⁾吉岡信敬は早稲田大学出身、全国に名を知られた応援団長のカリスマであった。⁽³⁸⁾滞雲中、義親とともに八雲対野田生の野球試合を観戦しているが



図5 徳川義親(右)と吉岡信敬(左)・泉谷祐勝(中央)
(八雲写真43)

〔大正一二・八・一五〕(恐らく農場小作人同士の対戦であろう)、この時「虎鬚彌次將軍」の異名を取った吉岡お得意の彌次も飛んだのであろうか。大正一五年(一九二六)春〔16〕には、同じ早稲田出身で野球部に所属していた泉谷祐勝と来場し、義親の熊狩に随行している(図5)。泉谷には仔熊二頭を抱えた熊狩記念写真もある(昭和三・三・二八)。

石川三四郎は、幸徳秋水と交流していた社会主義者にして無政府主義者である。義親は「社会主義であろうと国家主義であろうと、国民の幸福をはかる願望があれば、主義主張にこだわる必要はない」として、右も左も関係なく「要は日本人であること」が大切だとした人付き合いを心がけていた⁽³⁹⁾。その意味で、義親は石川を友人として尊敬し、息女の家教師に据えるなど生活の支援もしていた。中野雅夫『革命は藝術なり 徳川義親の生涯』(學藝書杯、一九七七年)によると、義親は、大正一二年九月の関東大震災後に警察に保護検束されていた石川を釈放させて、衰弱しきっている石川を「人をつけて密かに北海道の八雲におくり、徳川農場で静養させた」とあるが、石川が八雲にいたのは大正一二年夏〔12〕八月五日〜一五日までで、「日誌」からは震災後に八雲で静養したという記事は確認できない。これ以外で石川が来場したのは、昭和三年夏〔20〕で、この時彼は、義親が八雲で提唱した「ドロの

家⁽⁴⁰⁾」に居を定めて生活している(昭和三・八・一八)。なお、吉岡と石川は、来場中に得意分野の講演もおこなっている(後述)。

② 研究所員・助手 大正七年(一九一八)春〔2〕に記載される都築省三は、義親の生物学(植物学)研究の助手であったが、昭和に入ると、林政史研究室⁽⁴¹⁾や生物学研究所の所員・助手が義親とともに八雲にやって来るケースが目立ってくる。表1に示した(林)が林政史研究室、(生)が生物学研究所の関係者であることを指す。

まず、林政史研究室の関係者では、川合徳太郎の来場が重要である。川合は東京帝国大学農学部出身の林学士で、林政史研究室が雇った最初の専任研究員であった。昭和二年(一九二七)夏〔18〕の義親来場に先立って、六月に八雲入りして徳川農場内の立岩山林はじめ野田生山林・大野山林・八雲山林を実地調査するとともに(昭和二・六・四〜同・六・二四)、七月には来雲した東京帝大林学実科生の手島茂ら五名とともに、大野山林の施業案作成調査に向かっている。この作業には帝大教授の蘭部一郎も参加した。川合にとつての八雲は、専門領域である山林調査の場であり、仕事のための出張であったといえる。

昭和九年夏〔32〕に記載の「林政史所員」というのは、所三男・野口百合子・立石百合子の三名を指す。所三男は、木曾調査に向いた義親の知遇を得て昭和四年に研究員となり、戦後研究所の所長となった人物である。野口・立石は研究室の助手で、立石は古典に造詣が深く、源氏物語を研究していた⁽⁴²⁾。彼らは、同時期滞在していた大炊御門経輝に随行して室蘭・札幌方面の見学に向いたりしている(昭和九・七・三〇〜同・八・二)。この時、所三男は八雲から足を延ばして弘前調査にも向かった(昭

和九・八・四」。ほかに毛利文枝(昭和一二年夏【36】)、鯨岡禮津子(同一六年春【45】)、浜中たま子(同夏【46】)の名が見える。彼女らはおもに北海道見物のために来場した。

次に生物学研究所の面々である。昭和一〇年夏【34】に来場した服部廣太郎は、生物学研究所の所長である。服部は旧尾張藩士出身で、東京帝国大学理科大学講師。義親が東京帝大の植物学科に入学するとき便宜を図った人物として知られ、昭和天皇の生物学研究の師匠としても著名な人物であった。⁽⁴⁴⁾ 菌類学者でもあっただけに、八雲来場中に「附近林地に菌類採取」に出掛けている(昭和一〇・七・二〇)。その他の来場者として、大町文衛(29、昆虫細胞学、大町桂月の次男、稲荷山資生(36、植物細胞遺伝学)、平山重勝(28、植物病理学)、田宮博(30、植物生理学・細胞生理学)、湯浅明(28、植物細胞学)、奥貫一男(29、生化学)、山口清三郎⁽⁴⁵⁾(30、生体酸化研究)の名が見える(カッコ内のアラビア数字は来場時の年齢)。いずれも、のちに高名な生物学者となる錚々たる面々だが、この時は三〇歳代前後の気鋭の研究活動であった(昭和一六年に来場した宮本朝男は研究者ではなく助手⁽⁴⁷⁾)。みな学究活動というよりも、夏に来場して避暑を楽しんでいる様子がかがえる(大町は昭和五年夏【23】の来場中に講演し、奥貫は昭和一一年春【35】の熊狩に随行した)。

③―ア 大正期の来客 来客は大正・昭和と分けて見ていこう。

大正期の来客で注目できるのは、北白川宮成久王(大正一〇年夏【9】)、同永久王(同一四年夏【15】)、竹田宮恒徳王(前同)の三人である。義親と北白川宮とは、幼年期から縁があり、成久王は学習院で義親の一年下のクラス、弟宮の輝久王は毛利家の時習舎で義親と同室であった。⁽⁴⁸⁾ 成久王が名古

屋城内の第三師団司令部に勤務していた頃は、大正五年(一九一六)一月、翌六年四月まで、徳川家の大曾根邸(名古屋市中区)を借りて、そこを拠点に出勤するという間柄にあった。⁽⁴⁹⁾ 大正一〇年十一月、義親は箱根丸でフランスに留学する成久王から同船依頼を受けて、妻米子とともに旧婚旅行を兼ねた欧州旅行に出掛けているが、二人はその直前にも八雲で親交を深めていたことになる。永久王(成久王の第一王子)と恒徳王は従兄弟同士。永久王は、のちに尾張家分家の男爵義恕の次女祥子と結婚する。

成久王は、大正一〇年八月一八日に八雲に到着し、二九日に帰京の途に就いた。この間一九日に小樽に向いたりしているので、八雲滞在期間はそれほど長くはなかった。八雲における行程で目に付くのは、小樽に向かう直前、一九日の午前中に八雲産優良牝牝馬二〇頭を台覧していることである。「御着眼ノ御敏キ、一同ノ敬服シ奉リシトコロナリ」であったと参加した農場員は評している(大正一〇・八・一九)。室蘭を経て八雲に再来した成久王は、アイヌ部落を見学した後、八雲神社に参拝、境内にトドマツを植樹した(現存⁽⁵⁰⁾) (大正一〇・八・二七)。鉛川で鱒漁も楽しんでいる。八雲での体験が名残惜しかったのであろうか、成久王はフランスに留学する箱根丸に義親を誘い、一緒に欧州へと旅立つのである。ただし、成久王は外遊先のパリ郊外で自動車事故を起こし三五歳で薨去。第一報の電報が発せられたのが、事故のあった大正一二年四月一日、エイプリルフルだったこともあり、義親は成久王の事故死を誰かの悪戯かと思ったという。⁽⁵¹⁾ 同年六月八日の葬儀時には、八雲神社でも遙拝式があり、農場長の大島鍛が参拝した(大正一二・六・八)。

永久王と恒徳王は、大正一四年七月一六日に来場し、一週間後の二三日に八雲を発った。両宮の来場に当たって、義親は「従来、宮様の為に警察

が人民に迷惑をかけた例が多いから、今度は必其事のない様に、人民に少しでも迷惑をかけたらは、私は八雲に宮様のお出を願ふことができなくなる⁽⁵²⁾」と農場長の大島鍛に宛て、警察が住民に迷惑を掛ける過度な警備は控えるよう注意を促した。両宮の来場であっても大げさにせずに、町で国旗を出しても出さなくても宜しいと義親は述べている。「誰でも見上げたいだろうから」と、一六日の出迎えに制限は設けなかった。すると、来場当日は、町内公職者ほか学校職員・生徒ら有志一五〇〇名の出迎え者があつたという〔大正一四・七・一六〕。両宮が八雲神社を参拝した時には、成久王と同様、境内にイチイ(オンコ)の木を植樹している(現存)〔大正一四・七・一七〕。一九日にはアイヌの祈禱や誦を「御覧」になるとともに、和合会員である服部正定の語る移住当時の「昔物語」を興味深く「聞召」した⁽⁵³⁾。両宮の場合、雨天のため羊蹄山登山を中止するなど、当初予定の変更が生じているが、各所で鮎や鱒・鯖などの漁獲を楽しんでいる様子が「日誌」からわかる。二一日には、農場員を相手にテニスもした⁽⁵⁴⁾。

常二勝ル平、民的ナル御態度ニテ、ボールヲオ拾ヒシ、御渡シ申セバ、一々有難フト御会釈ヲ給ヒ、稀ニエラーナドナシ給ヒシトキハ失礼ト仰セ給ヒシナド、感泣スルノ外ナカリキ、而シテソノ御元氣ナルト御見事ナル御手腕ニハ一同驚嘆ス〔大正一四・七・二一〕

農場員は、両宮のテニスの「御手腕」に「驚歎」するだけではなく、何といつてもプレイの途中で「有難フ」と述べたり、ミスをしたときは「失礼」と返したりする「平民的」な態度に「感泣」している。その後両宮は、砂蘭部元牧場矢部坂を越えて高丘に至り、八雲一円を展望観賞し、絶景を堪能したあと、名残を惜しんで帰京の途に就いた。見送り人数は二〇〇〇人近くに及んだという〔大正一四・七・二三〕。翌一五年には、両宮の八

雲御成記念として義親から八雲神社に関口隆嗣(一八九〇―一九八〇、「大正十二年帝国絵画番附」の帝展洋画部門「入選格」に名前が記載される画家)が画いた洋画が奉納された。これも八雲神社に現存している。

③―イ 昭和期の来客 昭和期の来客では、昭和九年(一九三四)夏【32】の田中親美と森川勘一郎(如春庵)の来場が珍しい⁽⁵⁶⁾。二泊三日の行程で義親や大炊御門経輝ら一行と大関橋(八雲町上八雲)まで出向いて鱒漁体験をしている。その時の写真もある(図6)。ほかに昭和一〇年夏【34】の吉田茂・和子父娘、同一三年夏【40】の松井石根・大川周明の来場も注目できる。

戦後の内閣総理大臣として著名な吉田茂は、昭和一〇年一月に徳川美術館が開館した時の芳名帳記載第一号となった人物として知られるが⁽⁵⁷⁾、その直前に八雲で義親と交流を持っていたことになる。当時の吉田は、外務省を退官した直後で、時間的余裕もあつたのであろう、三女和子と来雲した模様である(和子はのちに実業家で政治家の麻生太賀吉と結婚。麻生太郎氏は和子の長男)。義親と吉田との接点は、昭和六年、麻布区富士見町にあつた徳川邸をフランス大使館に譲渡する際⁽⁵⁸⁾、外務省でこの案件を担当したのが、外務次官の吉田茂であつたことによる。八雲の吉田父娘には前拓務次官であつた坪上貞二(満洲移民推進論者)も同行した。途中から札幌控訴院長の三宅正太郎も合流し、ともに煉乳会社・製酪工場・八雲神社などを見学し、札幌に向かつている(図7)〔昭和一〇・七・二八〕。

昭和一三年は八雲開墾六十周年に当たる節目の年であつた。この記念の年に来場したのが、陸軍大将の松井石根と陸軍中堅層と結びついて民間で国家改造運動に関与していた大川周明であつた。義親と大川周明とは、昭和六年の陸軍のクーデター未遂事件(三月事件)以来、急接近したことで知



図6 田中親美と森川勘一郎ら（八雲写真106）
右から大炊御門経輝・絹子・田中・森川



図7 徳川義親と吉田茂ら（八雲写真112）
左から坪上貞二・徳川義知・三宅正太郎・吉田茂
・同和子・徳川義親



図8 松井石根の講演（八雲写真1155）
右下に徳川義親・大川周明らの姿も見える

④—義親の学生 「先生お帰りなさい、とう／＼大勢で御厄介になりました」といって登場するのが、学習院学生五名である（大正一〇年「一九二二」春〔8〕）。前年大正九年に、学習院の生物学講師を委嘱されていた義親の教え子たちで、三月一八日に八雲にやって来た。翌日の義親の熊狩にも随行し、熊一頭の猟獲にも立ち会い、「熊狩慰労会」にも参加するという、彼らにとってまたとない旅行となった（大正一〇・三・一八／同・三・二二）。註（63）義親の随筆には、「伊藤、真田兄弟、大久保兄弟」と出て、フルネームでは真田幸尚・大久保寛一（大久保一翁の孫）の名が登場する。彼らは鮭採卵場やアイヌ部落なども見学し、三月二四日に樺太に向け

られていた。^{〔59〕} 松井といえば、日中戦争時に上海派遣軍司令官を務め、南京戦を指揮した将軍として著名であるが、もともと旧尾張藩士の出自であったことから、義親とも親交を持っていた。尾張国出身の陸海軍将校を養成するため設立された尾張武揚社の社長となり、義親はその総裁でもあった。^{〔60〕} 来場中は、大川とともに六十年記念祭に臨席し、松井は八雲小学校における「松井大将歓迎会」に臨んで講演もおこなった（図8）。終了後は真萩館で和合会員一同と写真撮影に及んでいる。前年から日中戦争が始まっており、八雲から出征し、戦死・戦病死した軍人遺族を松井が慰問していることも、当時の世相・時代状況の特徴付けしている（昭和一三・八・六）。^{〔61〕}

なお、昭和一五年夏〔44〕に来場した鈴木喜久雄は、音楽を通じて豊かな人間を育てることを目的とする、いわゆる「スズキ・メソード」の創始者、鈴木鎮一の弟である。鎮一は大正八年における義親の北千島探検や、同一〇年の欧州旅行にも随行しているが、弟も兄ほどではないにせよ交流があったことがわかる。^{〔62〕}

て旅立った〔大正一〇・三・二四〕。

学生の中でも特徴的なのは、昭和十二年（一九三七）～一五年にかけて来場した桜菊女子学園や山脇高等女学校（現・山脇学園）の女学生たちである。彼女たちは修学旅行で八雲を訪れたのであった。桜菊女子学園は徳川美術館（名古屋市東区）の近くにあった女学園で、山脇高等女学校は義親が礼法講義で講師を務めていた女学校である。義親は彼女たちの修学旅行のプランを検討するとともに、八雲を「観光地」として提供し、場内で農業実習させたりしているのである〔昭和一四・八・一～同・八・四など〕。巡見先としては、八雲神社、遊楽部川の鱒狩、アイヌ部落、煉乳工場、製酪工場が定番化していく様子も、農場「日誌」からうかがうことができる。

最後に、表1の昭和一五年春【43】・一六年夏【46】に出てくる「啓明寮生」を取りあげよう。啓明寮は戦前の尾張徳川家が主宰していた学生寮で、旧尾張藩内出身で東京帝国大学に通う学生が入寮し、徳川家と親交を持つようになっていた⁶⁶。啓明寮は、昭和一四年に竣工し、この年六月に四名の学生が入寮している。

農場「日誌」からは、昭和一五年に川村重雄（工学部機械工学科）が一人で来場〔昭和一一・七・二四〕、同一六年には、蜂須賀栄治（理学部地質学科）・江崎勤吾（経済学部）・酒井健一（農学部水産学科）・羽塚宣正（文学部国史学科）・加藤英夫（医学部医学科）が、何班かに分かれて来場したことがわかる〔昭和一一・八・二～同・八・一〇〕。なかには八雲からさらに足を延ばして、「奥地」へも出向いて北海道の夏を堪能した者もいた。彼らのほとんどが大学の卒業を繰り上げられ、昭和一六年一二月に卒業、翌一七年二月に入隊しているのである。川村は初代入寮者の一人で最年長の学生、一番早くに卒業、退寮して鉄道省に入省するも、昭和一七年二月に応召、

北支派遣軍として包嶺へ出征した。戦後、モンゴルの張北附近でソ蒙軍の攻撃を受け、連行されて以降行方不明。シベリアで戦病死したともいわれている。江崎も、昭和一七年二月に陸軍に入隊し、主計幹部候補生となるも、発熱のため一八年に陸軍病院に入院、療養空しく昭和二〇年九月二日に他界した。羽塚も南方で戦死している。羽塚は雅楽にも通じていたという。生きていれば、名古屋東照宮雅楽部の中心となっていたとされる人物であった。

遠からず戦地に赴く学生たちにとって、八雲は一時的ではあったにせよ、現実を忘れ青春を謳歌できる癒やしの地であったことは、啓明寮生の一入である後藤甫（法学部政治学科）の証言からもうかがうことができる。

昭和一七年一月にマレー軍政顧問となり、二月に南方に向けて日本を発っていた義親は、この年から戦後の昭和二五年まで、しばらく八雲を訪れることはなかったが、啓明寮の学生たちは、義親の来場とは関わりなく八雲を訪れていたのであった。以下は、後藤が寮の仲間と一緒に北海道を訪れたときの様子である⁶⁶。

昭和十七年のその頃は、われわれは厳しい現実からまだいくらか隔てられ、守られていたように思われる。戦争を傍観し、全体主義的統制に反発を感じる若者にとって、目白の森（啓明寮）は自由の聖域であった。いずれ戦地に赴く青春の想い出にと、大勢で（加藤（英夫）、野田（春彦）、堀尾（忠雄）、佐分（正雄）、後藤（甫）の五名）ニセコをめざし、北海道へ出かけたのだから呑気な話である。スキーをかつぎ込んだ満員列車では、さすがに冷たい視線を受けた。初めての北海道の印象では、大沼の車窓から見た雪景色の美しさが、いまま鮮やかに想い出される。八雲農場でご馳走になった石狩鍋の美味しかったこと。清冽な

流れに泳ぐ鮭の優美な姿は、塩鮭しか知らぬわれれに感銘を与えた。

二〇歳代前半の戦時下の学生たちにとって、開墾六〇年を過ぎた八雲や北海道各地での初体験は、一時の安息を得るのに十分過ぎる環境であり、文字通りの楽園だった様子が彷彿とする。

以上見たように、義親と関係したさまざまな人びとが八雲を訪れていたことがわかる。そして、彼らは自身の置かれた立場や状況によって、八雲との関わり方に少しずつ違いが見られたことも明らかとなった。来場者を迎える義親も、人によって接し方が異なっていたことは、第二章(二)の冒頭で述べたとおりなのだが、一方で、来場者に対して、ある共通した思いを持って臨んでいたのではなかったかと思われる節もある。

この点、大正一四年に北白川宮永久王と竹田宮恒徳王が来場した際に、義親が『北海タイムス』に寄稿した「宮様を迎へる心」⁽⁶⁷⁾は、来場者に対する義親の意識を知る上で参考となる随筆と思われる。

ここで、義親が述べているのは、北海道ないし八雲に来場したからには、「真の北海道」を感じて帰って欲しいということであった。義親は、「真の北海道」は都会にあるのではなく、漁村にあり農村にあり、牧場にあるのだと断言する。その意味で、八雲は「真の北海道」を体感できる恰好の地であった。来場者を過度に丁寧にもてなし、各地で専門家による説明が付き、草臥れてもいないのにマニュアル通りに休憩する、という予定調和のおもてなしを義親は殊更嫌った。内地からの来客には、「粗末」な北海道産の野菜や魚介類を食べさせられないとして、あえて内地から取り寄せた(しかもだいぶ日が経った)食べ物を提供するという、役人にありがちな卑屈な態度を真っ向から批判し、北海道の人は北海道に誇りを持って、自信を

持つて「我北海道」を紹介すべきだというのである。

こうした意識を根底に持っていた義親であっただけに、両宮に対しては、少しの人工も加えない、万事ありのままの八雲を見て欲しいと、自然に接したのであった。「宮様をお迎へする方法は万事自然のまゝ、大騒ぎをしないこと、人が沢山ぞろ／＼とついて歩かないこと、思召を伺つて其通りになること、いらないとおつしやつた時は、本当にいらないのだ」を基本に据えて行動していった(裏を返せば、これは侯爵の自らに対しても八雲の地域住民に要求していたことではなかったか)。だからこそ、両宮は毎日馬に跨がり「自由に八雲の村中駈けまはつて」、川狩に行つても、喉が渴けば川の水を飲み、アイヌと一緒に一つ鍋の鱒汁もすすつたのである。こうして、両宮は「八雲中をよく御覧になり、農村生活の実際についてはつきり見ておいでになつた」と、義親は言い切つたのである。

これは、両宮はか皇族に対する義親の基本的態度であつたにせよ、型どおりではなく、万事自然のまま、ありのままの八雲を見せたい、という姿勢は他の来場者に対しても共通していたのではなかったろうか。来場者はそれぞれの立場で、八雲を「自由」に堪能し得たであろうことは(八雲ならではの川狩やアイヌとの交流、酪農関係施設見学と併せて、人によって野球観戦したり、登山をしたり、テニスをするなど、楽しみ方は異なっていた)、前述した各人の様子からもうかがうことができる。

三 八雲における活動の諸相

先には、来場者の視点で八雲における具体的な活動を見てきたが、ここからは大正・昭和戦前期の八雲で、義親がどのような活動をしていたの

か、表1を踏まえながら、これまで触れてこなかったことを中心に見ていくことにしたい。

(一) 熊狩の意味

熊狩については、アイヌや来場者との交流を述べる中で少し触れたところであるが、ここで注目したいのは、そもそもなぜ義親は、熊狩に関心を持ったのかということである。

これについては、義親自身の言葉で説明して貰おう。以下の引用は、大正一五年（一九二六）五月四日、「熊狩の話」と題して義親がラジオ放送で話したことである。⁽⁶⁸⁾この日、徳川農場では、農場員一同がラジオの前に集合し、聴講した（大正一五・五・四）。

私が熊狩など、云ふとほけたことをやり始めたのは、今から丁度十年ばかり前のことであります。或日実験室で顕微鏡を覗いて居ましたら、急に熊のことを考へ出したのであります。それがだんだん拡がって、頭の中に熊が一ぱいに詰つてしまつたのであります。…北海道から来て居る助手の都築（省三）を呼んで、「オイ／＼都築、一体熊は冬の中どうして居るだらう」「熊は冬の間は穴の中で何も食わずに寝て居ります」「それではお腹が空いて困るだらう」と云ふやうな愚問愚答をやつたのであります。そこで熊狩がしてみたくになりました。それ以来、熊狩は私の年中行事の一つになりまして、毎年欠かさず三月末から四月にかけて、北海道に熊狩に出かけるのであります。

これによると、突然降って湧いたように熊の生態が気になりはじめ、居ても立つて居られなくなり、ついに熊狩をするに至つたというのである。⁽⁶⁹⁾

初めて挙行されたのは大正七年春【2】、この年は朝日新聞の漫画漫文記者であつた岡本一平（芸術家・岡本太郎の父）も随行し、漫画とともにその顛末をまとめた。⁽⁷⁰⁾その後八雲では二〇回の熊狩が挙行されている（そのうち成功したのは、表1「熊狩」の項に○印で示した九回）。

ただし、このエピソードは後年過去を振り返るに当たって、やや単純化されたきらいがある。同時代の義親はもう少し踏み込んだ説明を加えていた。以下の引用は、大正七年、第一回熊狩を実施する直前の義親の言である。⁽⁷¹⁾

研究して見たいと思ふのは、穴居してゐる熊の生活状態で、其の生理的作用には多様な面白い事もあるだらうと思つてゐる、即ち内臓がどんな具合に働いてゐるのか等を見る為に、内臓物を部分的に切り取つてアルコールに漬けて持帰るつもりである、又夏季は茶色をしてゐて、冬季雪が降ると雪白に毛が変る越後兎なども居るから、之れも研究資料として獲つて来る

これによると学術（生物学）研究の一環で、熊の内臓を取得することと併せて、季節によつて毛が変色するエチゴウサギも捕獲し、持ち帰ろうとしていたことがわかる。熊狩だけが一人歩きしているが、実際は広く生物の生態観察のためにおこなわれていたものなのであつた。⁽⁷²⁾

しかも、義親の生物学研究は、理学博士の学位を取得するのが目的ではなく、「人種改良に寄与したい」という壮大な抱負があつた。「人種改良と徳川侯爵」と題した新聞記事を以下に示そう。⁽⁷³⁾「研究の主題は、人種改良の根基をなしてゐる遺伝法則で、種々なる動植物の細胞中に在つて総ての遺伝を司ると云ふ染色体の研究である、今回侯爵が北海道に熊狩の壮挙を企てたる事は、既報の如くなるが、之も全く侯爵日頃の研究に係してゐる

る⁽⁷⁴⁾。

熊狩を通じた生物学研究がいかに進展したか、経過をたどることは難しいが、義親は当初抱いていた学問研究のためから、次第に熊狩そのものに魅せられていった。以下の随筆は、そのことをよく示している。⁽⁷⁵⁾

吹雪の席捲く八雲の曠野を櫓に乗つて、冷たい鉄砲を膝に抱いて頭からすつぱりとマントをかぶり、飄々とまともから吹きつける粉雪を冒して馬を馳らせてゆく。御者の鞭がピシリと鳴る。馬の頸についてゐる鈴の音、雪の櫓にきしむ音、夢の様にき、ながら、骨に徹する寒さも亦快く、うつら／＼と物思ひに耽つてゐる。熊がグワーといつて飛びかゝつて来る瞬間。銃口から迸る火花。焰硝の香たまらない誘惑である。こんな時の心の裡は極めてあた、かい。本当に恋人にでも逢ひにゆく時の様な気がしてゐる。命が無くなるかも知れないのは恋と冒険だからであらう。山には真黒い恋人が待つてゐるから。

義親は、まさに「恋人」に逢いに行くがごとく熊狩に出向いて、恍惚に浸つていたのであつた。

いっぽう、地元の人にとつても、義親の熊狩は必ずしも「殿様の道楽」という意味とは受け取らなかつたようである。義親はいう。「肝腎の当人は、今年熊が獲れなければ明年と極めて呑気に構へてゐるのに憤慨したのは、かへつて八雲村の人々であつた。殊に、農場の監督の大島（鍛）の如きは、大きい目玉をぐる／＼として、躍起になつてアイヌを召集して相談した」というように、農場長の大島鍛が、かえて真剣に熊狩の世話をしていたのであつた。これは、義親の意識を八雲につなぎ止めたという大島の思いから出た行動ではなかつたらうか。もつとも、熊狩がなくとも、義親は先祖から継承した所有地である八雲を見放すことはなかつたであらう

が、大正期の徳川農場では、襲爵したての若き当主が、八雲に飽きないよう熊狩を通じて接待しようとしていたものと見ることもできよう。その意味で、義親と八雲とを結びつける契機のひとつに熊狩があつたといえる。もつとも、義親にとつて、八雲といえば熊狩だけではなかつたのは、表1を見ればわかる。しかし、熊狩は、原則八雲のみに限つていた。⁽⁷⁶⁾それだけ、八雲の熊狩というのは特別だったのであらう。昭和十三年春【39】の熊狩では、同行者が少なく、義親は「熊狩もう末になつた」と寂しい思いを吐露している【昭和一三・三・三〇】。

(二) 講演会とその目的・影響

表1に示した「講演会」というのは、八雲に來た義親が講演したかどうかを示したものである。これを見ると、年二回の來場のうち時期を問わずに頻繁に講演していた様子がうかがえる。講演会の様子をもう少し詳しくまとめたのが、表2である。ここには開催日や演題、会場、聴衆人数をわかる範囲で掲載した。

表2によると、大正六年（一九一七）から昭和十六年（一九四一）までの二四年間で、義親は三四回もの講演をおこなつていたことがわかる。もつとも、義親の場合、昭和四年末以来、八雲高等国民学校の校長を務め、八雲に來た時には必ず国民学校に立ち寄り生徒に訓話をし、同校学芸会に臨席した際にも講評を述べたりしていたが、それらは表に掲載しなかつた。また、八雲では、義親が演者になる以外にも、新聞社主催の講演会や学校教員・農会関係者らによる講演もしばしば開催されているが、ここでは割愛し、義親が來場中に開かれた講演会を特に取りあげて掲載した。ただし、

表2 八雲で開催されたおもな講演会(大正6年～昭和16年)

番号	和暦(西暦)	月日	講演者	演題	会場	聴衆人数
1	大正6年(1917)	7月30日	徳川義親	農作物品種改良と遺伝学に就て	真萩館	30名
2	大正9年(1920)	7月30日	徳川義親	澱粉ニ就テ【第1回真萩講演会】	真萩館	30名 (35名とも)
		10月25日	白戸八郎	日米問題に就て【第2回真萩講演会】	(真萩館)	32名
3	大正10年(1921)	8月22日	徳川義親	(南洋方面視察談・猛獣狩談)	(真萩館)	300余名
4		3月3日	徳川義親	(欧州漫遊談)	産業組合事務所	200余名
5		3月4日	徳川義親	(農場優良農家表彰にあたっての講演)	大関小学校	
6		3月26日	徳川義親	(欧州漫遊談)	(野田生)	
	大正12年(1923)	8月9日	石川三四郎	仏蘭西の百姓【第3回真萩講演会】	八雲教会	100名 (120名とも)
		8月10日	石川三四郎	仏蘭西の農業に就て	真萩館	
7			徳川義親	家屋の改造その他		
		8月14日	吉岡信敬	運動競技ニ関シ【第4回真萩講演会】	信用組合	80名
		8月27日	井上 秀	婦人の自覚【第5回真萩講演会】	遊楽座	250名
8		9月1日	徳川義親	(演題不明)*『校友会誌』	八雲中学校	
9	大正13年(1924)	3月28日	徳川義親	(演題不明)*『校友会誌』	八雲中学校	
			吉岡信敬	(演題不明)		
		8月14日	今井時郎	露西亜に就て【第6回真萩講演会】	事務所	24名(男21名 ・女3名)
10	大正14年(1925)	4月11日	徳川義親	(演題不明)	八雲中学校	
11		7月25日	徳川義親	両宮殿下中学校御成中止ニ就テ及物事ハ終リカ大切	八雲中学校	
12		3月30日	徳川義親	農民生活の改善に就て	高等国民学校	
	大正15年(1926)	7月19日	山本鼎	農民美術に就て【第7回真萩講演会】	在郷軍人会八雲分会	40名
		7月20日	山本鼎	土産品と手工芸【第8回真萩講演会】	新陳列所	35名
		7月21日	山本鼎	手工教育と工芸【第9回真萩講演会】	家政女子学校	
		7月22日	山本鼎	図画の教育的立場【第10回真萩講演会】	黒雲寮	45名
		7月30日	羽仁もと子	人各々ノ生活ノ対象【第11回真萩講演会】	八雲教会	70名
12	昭和2年(1927)	4月10日	徳川義親	人生ノ目的(日本メソジスト教会青年共励会員向け)	真萩館	20名
13		9月3日	徳川義親	(道路改良会北海道支部講演会所感)		
14	昭和3年(1928)	4月4日	徳川義親	(演題不明)	八雲中学校	
15	昭和5年(1930)	3月15日	徳川義親	(南洋旅行談)	八雲高等国民学校 八雲中学校	
		8月13日	大町文衛	共棲と寄生【第12回真萩講演会】	在郷軍人会八雲分会	95名(男91名 ・女4名)
16			徳川義親	衣食住【同上】		
17	昭和6年(1931)	6月9日	徳川義親	(演題不明)	八雲中学校	
18		8月2日	徳川義親	(演題不明)	八雲町聯合女子青年団大会	
19		2月27日	徳川義親	我国中央ニ於ケル時局批判ト八雲住民ノ覚悟 【第13回真萩講演会】	真萩館	44名(男40名 ・女4名)
20	昭和7年(1932)	2月29日	徳川義親	虎狩	八雲中学校	
21		3月1日	徳川義親	虎狩	八雲高等国民学校	
22		3月3日	徳川義親	農民ハ無産者ニ非ス	八雲高等国民学校	
	昭和8年(1933)	7月28日	成相直子ほか(自由学園卒業生)	(婦人労働服講習会)*義親による奨励あり	白雲荘	(女50名弱)
23	昭和9年(1934)	4月21日	徳川義親	(演題不明)	八雲中学校	
24	昭和10年(1935)	3月20日	徳川義親	(演題不明)	八雲中学校	
25		3月22日	徳川義親	(雪おくりの趣旨)	在郷軍人会八雲分会	
	昭和11年(1936)	9月29日	櫻井 鎧三 (陸軍少佐)	最近の国際情勢【第14回真萩講演会】	真萩館	60名 (男60名)
26	昭和12年(1937)	3月29日	徳川義親	(酪農経営合理化運動青年委員講習会で演説)	八雲中学校寄宿舎	
27		3月28日	徳川義親	(中支戦線視察談)	八雲小学校	200名
28	昭和13年(1938)	8月4日	徳川義親	(礼法・上海の話) *渡島支庁管内町村の学校長対象	八雲小学校	
29		8月9日	徳川義親	(演題不明)	八雲実科高等女学校	
30	昭和14年(1939)	4月1日	徳川義親	(演題不明)*熊狩場館前	大関小学校	
31	昭和15年(1940)	7月24日	徳川義親	(阅兵式と分列式後の講話)	八雲中学校	
32		7月27日	徳川義親	(演題不明)	八雲実科高等女学校	
33	昭和16年(1941)	3月9日	徳川義親	(演題不明)	八雲中学校	
34		8月6日	徳川義親	(中学校・国民学校の先生に礼法講演)	八雲実科高等女学校	

徳川農場「日誌」(八雲334～358)、「講演録(真萩講演会)」(八雲645)より作成。



図9 真萩館（八雲写真629）

来場中でなくても、「真萩講演会」と銘打たれた講演に関しましては表に示している（これらは表2に番号を付けていない）。

そこでまず、「真萩講演会」について確認しよう。この講演会は、大正九年の第一回から昭和十一年の第一四回までを確認することができる。記念すべき第一回は、大正九年七月三〇日、徳川義親を講師とした「澱粉二就テ」で始まるが（聴講三〇名、三五名とも）、以後、原則として

義親以外の演者が登壇し（第二・三回は義親だが、不定期に開催された。⁷⁷）

真萩講演会とはいえ、徳川農場内の真萩館（図9）以外でも開催されており、農場が主催した講演会をこう称していたものと想定される。聴講者には農場小作人も少なくなかった。最盛期には、年に三〜五回開催され、例えば大正一二年夏【12】には、前述の石川三四郎による「仏蘭西の百姓」（八月九日、聴講一〇〇名、二二〇名とも）、同じく吉岡信敬の「運動競技二関シ」（八月一四日、同八〇名）、井上秀「婦人の自覚」（八月二七日、同二五〇名）と、立て続けに企画され、時には来場中の義親・米子夫妻も臨席した。

とりわけ、日本女子大学家政学部長の井上秀による講演は、開町以来初めての女性による講演で、聴講者の大部分が婦人であった（大正一二・八・二七）。関心の高さは、二五〇名もの聴講者がいたことからわかる。大正一五年に、北豊島郡高田町（東京都豊島区）の自由学園生徒二五名

を引率して来場した羽仁もと子も（大正一五・七・二〇）、この年七月三〇日に「人各々ノ生活ノ対象」と題する講演を日本メソジスト八雲教会でおこなった（聴講七〇名）。もと子は、下って昭和七年にも、広島高等女学校教諭の高森女史とともに再来し、九月一日には食物や衣服に関する座談会が真萩館で開催されている（参加者二〇名）（昭和七・九・一）（義親不在中に開催された座談会のため、表2には掲載していない）。

ちなみに、真萩講演会ではないが、関連するものとして、表2の昭和八年七月二八日に開催された婦人労働服講習会がある。これは、かねてから徳川農場で検討していた、婦人労働服を主題とした女性向けの内容であった。参加女性が「明日から使える服」を製作することを前面に打ち出して開催した講習会で（申込者五〇名弱）、講師は自由学園の卒業生である成相直子らが務めた。自由学園は国内で最も進歩的に婦人服装改善運動を展開していたことで知られる。⁷⁸

真萩講演会に戻ろう。第七回から第一〇回まで四回連続で講演を担当している山本鼎にも注目したい。山本鼎はロシアの民芸品に感化されて、大正八年に長野県神川村（現・上田市）に農民美術練習所（のちの日本農民美術研究所）を設立し、農閑期を利用した農家の生活改善と、美術を通じた農民の生きがいを追及した人物であった。⁷⁹ 義親もまた、大正一〇年から翌一年にかけての欧州旅行でスイスを訪れた際、農民の手工芸品が販売されているのを見て、木彫品の制作を八雲に奨励していたことで知られている。⁸⁰ 農閑期の副業のためだけではなく、高尚な趣味を持つことで、農民も精神的な豊かさを追求し、文化水準を高めるべきだという発想からなされたものであった。農村開発を通じて国家の興隆も展望していた。表2の4・6「〔欧州漫遊談〕」は、これらと関連した内容だった可能性も指摘されてい

る。⁽⁸¹⁾その後、徳川農場の主導により八雲で木彫品制作への取り組みが奨励され、大正一三年三月には道内初の第一回農村美術工芸品評会が開催された(三月二六日～二八日)。農民美術の先駆者である山本鼎を招聘した大正一五年の連続講座は、図らずも海外で農民(農村)美術に共鳴した両者が接点を持ったという点で、貴重な成果であったといえる。そのうち、第一〇回真萩講演会の演題「図画の教育的立場」は、山本が提唱していた「児童自由画の奨励」とも関連があらう。山本は、模写本位のこれまでの図画教育を批判し、直接的表現である自由画こそ児童の創造性を育てる真の教育だと訴えていた。⁽⁸²⁾

なお、八雲でははじめ農民に限らず、農村全体で生活改善を図ろうとする発想から「農村美術」と称していたが、山本鼎の影響もあってか「農民美術」と表記するようになったという。⁽⁸³⁾八雲町の有志や徳川農場の関係者が会員となって、制作品を互いに批評し合う八雲農民美術研究会も立ち上がり、手工芸品の制作に磨きがかかり、各地に販売されていた。

つぎに、義親が講師となった講演会に注目しよう。表2を見ると、義親の演題は自身の体験談と併せて、その時々時事問題であったことがわかる。こうした啓蒙活動を通じて、義親は八雲の住民に知恵を授けていたのである。注目できるのは、大正期と昭和期とで開催場所に違いが見られることである。すなわち、大正期の講演会は会場が一定していないが、昭和に入ると中学校などの教育機関で講演することが頻繁になってくるのがわかる。残念ながら演題が不明な場合も多く、義親が青少年に向けて何を話したか、明らかにすることは現状では難しい。ただ、八雲中学校を前身とする現・八雲高等学校には校史資料記念館があり、そこに保管されている八雲中学校『交友会誌』(大正一四年創刊)から、中学校での講演内容が判明

する場合もある。『交友会誌』の全貌を把握するのは今後の課題であるが、創刊号には義親の講演録が二本収録されている。⁽⁸⁴⁾

一本目は、大正一二年九月一日の講演(表2の8)である。ここでは、八雲町の歩みを述べつつ、奮闘努力する大切さを訴えていることが重要である。「この八雲町が今日の盛を致すまでには、数多の人々が非常な奮闘努力を捧げた土地であることを忘れて貰いたくない」と訴え、「何事にも奮闘努力が大切である」とした。先人の努力に思いを馳せながら、実践躬行(口先だけではなく自ら行動すること)の大切さを述べた講演であった。

二本目は、大正一三年三月二八日(表2の9)で、この時は「今回は熊狩に來たのである。それと農村に趣味の生活を鼓吹し、副業を奨励したいといふ考から農芸美術展覧会を開くことにしておいた」などと、来場の趣旨を述べている。実際、この年は熊狩をし(ただし獲物なし)(大正一三・三・二五)、前述した第一回農村美術工芸品評会が開催され(同・三・二六・同・三・二八)、義親も吉岡信敬とともに品評会を訪れている。この中学校での講演終了後に、品評会の褒賞授与式が挙行され、義親も臨席するという行程であった。

先にも述べたように、今後『校友会誌』の調査・分析を通じて、中学校で話した義親の講演内容を把握していきたいが、ここで指摘したいのは、義親が教育機関で講演しているのは、生徒・青少年に対する期待の現れと見なせるのではないかということである。もともと、義親は早くから農村青年の自覚を覚醒させるために、「青年演説会」を開催していたが(大正七・八・二六)、⁽⁸⁵⁾昭和に入るとこうした傾向がより顕著になってくるように思われる。それは、大正末期から始まる全国的な農村の困窮・疲弊と無関係ではなかったらう。農村の実情に対して、義親は政府の無策を批判し

つつ、農民の自立更生が不可欠だとして、農民の自覚を促す論説を新聞・雑誌に盛んに発表していた。義親は、「農村の更生は肉体の勤労と共に、頭の労働を必要とする。…農民自身に考へさせ、反省させ、そしてこれを実行させる時に、始めて農村更生の曙光を見得るのである」と述べ、「八雲を救ふものは八雲自身でなければならない。我が郷土を愛する青年の力により、八雲は必らず更生すると信じる」と、「郷土を愛する青年の力」に大きな可能性を見いだしていた。⁽⁸⁶⁾

青年が郷土への愛を育むためには、現状を直視し把握するだけではなく、これまでの地域の歩みや先人の努力を理解する必要がある。義親が歴史を重視する視点を有していたのは先にも見たとおりである。

(三) 水上大運動会と相撲観戦

表1の項目に「競技大会」とあるのは、義親が八雲各地の青年団聯合などによる陸上競技大会や、八雲高等国民学校の生徒による武道大会に臨席したかどうかを示したものである。

義親が、八雲の青年団聯合の競技大会に臨んだのは八月であったが〔大正一二・八・一三、昭和三・八・一三〕、昭和五年(一九三〇)以降は、義親の滞在中ではなく、六月に開催されるようになり〔昭和五・六・一五、同六・六・二四など〕、義親は観戦しなくなった。ただし、最高得点チームや優勝者には、徳川家から優勝旗や優勝カップが授与されるなど、青年の体育奨励と人材育成に尽力していることがうかがわれる。また、義親は昭和四年十二月一〇日に農業実業学校である八雲高等国民学校の校長に就任すると、同校に通う生徒と交流を深めていくようになる。表1「競技大

会」に示したごとく、生徒の武道大会にも毎年臨席し、彼らと一緒に撮った写真も数多く残されている。国民学校に関するエピソードも多々あるのだが、それは紙幅の関係で別稿に譲りたい。

ここでは、大がかりな競技大会ではなく、恐らく義親の思いつきで真夏に開催された一回きりの水上大運動会(八雲町では初)を紹介しよう。この大会は、大正九年(一九二〇)七月三日、遊楽部川にある鮭の採卵場(八雲町上八雲で開催された【7】。滞在中の義親・米子夫妻が総裁、義親の姪・松平銀子は副総裁という立場で臨席している。当日は、天気にも恵まれ近郊町村からも多くの人が押し寄せ、観衆は総勢一五〇〇余名という空前の賑わいとなった〔大正九・七・二三〕。こうしたなかで、義親夫妻は「大元氣」で、「相変らず平民的なりし」と評され、地域住民と一緒に盛り上がっている。⁽⁸⁷⁾

この大会では、一五種の競技のうち、落部村(現・八雲町)の古玉清蔵という若者が「水泳」「長距離水泳」「二人ツナギ水泳」で三冠王となり、賞品・賞金を獲得した。⁽⁸⁸⁾「愛奴舟漕ぎ競争」は、アイヌの「丸木舟」を扱う競技で「此処ならでは見られぬ競技」として注目を集めた。丸木舟の「廻航レース」では、義親と親しいアイヌのトヨ(トイタレキ)が優勝している。⁽⁸⁹⁾トヨはこの年三六歳、和名を椎久年蔵といい、義親の熊狩にも案内役として随行するアイヌの常連であった〔大正一二・二・二七、昭和五・三・一五など〕。熊狩の功労者として「御紋章入り」大碗を下賜されたこともある〔大正一五・三・二九〕。

それにしても、義親の一声で競技参加者とともに、一五〇〇名もの観衆が参集するのは、義親の存在感の大きさとともに、地域住民が日常生活からの解放を求めていたことの証左とも見ることができる。機を見るに敏の



図11 遊楽座(八雲写真388)



図10 水上大運動会(八雲写真915)

庶民感情に通じた義親だからこそ、参加者と同じ目線に立って、皆と楽しむことができたのであろう。八雲で一回きりの水上大運動会は、地域住民への慰労と併せて、彼らと侯爵との距離感を縮める効果を持ったことは疑いない。八雲の短い夏を、侯爵と地域住民とが濃密かつ楽しい時間を過ごした思い出のひとつとして、ここで紹介しておきたい。図10の写真は、八雲の高橋写真館が撮影したもので、『函館毎日新聞』などの新聞でもこの写真が使われた。

もうひとつ、これまで八雲の義親を語る上で、あまり触れられて来なかった活動に、大正六年夏【1】と同九年夏【7】における相撲観戦がある(表1の「その他」に示した)〔大正六・八・四、同九・七・二七〕。どちらも本町の遊楽座(図11)の側でおこなわれた興行で、大錦大五郎が土俵に上がったことも共通していた。大錦は愛知県海部郡鍋田村(現・弥富市)出身の力士で、大正六年の時は大関、八年には横綱になっていた。⁽⁹¹⁾大正六年時は西ノ海嘉治郎(大関)、八年時は栃木山守也(横綱)と取り組んだと思われるが、勝敗の記載はない。愛知県出身の力士が取組に登場することで、勧進元から招待を受けての観戦であったといえる。

(四) 雪おくりと郷土芸術・創造力

八雲における郷土芸術の追求といえば、前述した八雲農民美術研究会の活動から産み出された「熊彫」が第一にあげられよう。⁽⁹²⁾表1の「農民美術」の項目では、義親自らが木彫り品を制作したり〔昭和二・八・二五〕同・九・六〕、農民美術研究会に臨席して「有益」な指導に及んでいる状況を示した〔昭和七・三・二、同・七・二九など〕。農場「日誌」を通観して

気づくのは、義親が農美研究会に参加するのが、帰京の直前であったことである。恐らく定例化していたのであろう。このような農美研究会の活動については、前掲註(80)の諸文献と併せて、最新の研究成果である本誌掲載の大谷茂之・香山里絵論文を参照されたい。⁽⁹³⁾

ここでは、これまでほとんど取りあげられてこなかった「雪おくり」に注目しよう(表1の昭和十一年春【35】・同一四年春【41】の「その他」に記載)。

「雪おくり」は別名「雪祭り」とも称され、八雲新報社主催、徳川農場の後援で昭和十一年(一九三六)と同一四年に開催された、八雲町をあげてのイベントであった。⁽⁹⁴⁾ 義親は、このイベントについてこう語っている。「永い間親しみ、又は苦しんできた雪の世界におさらばをするちよつと前に、こうして雪の芸術を作り楽しむ、春陽一閃、一度にあつさりとけて流れてしまへばその苦勞や楽しみはたゞの思出となつて、あとには何も残りはせぬ、つまりこれは雪まつりだ」と。⁽⁹⁵⁾ 要するに、半年間苦しみ、そして親しんできた雪と別れる前に、名残を惜しんで「雪の芸術品」をみなで作つて、雪を「山に送るかへし」⁽⁹⁶⁾ (この表現は「熊祭」を彷彿とさせる)、その後やがて来る春を歓喜をもって迎えようとする試みであった。冬と春との季節の変わり目という短い期間にしか作れないものを作り、ともに楽しんだ後、これまでの苦しみや楽しみも春までに溶かして、一緒に流そうという思いも込められていた。「芸術」を追求していたことから、農閑期の農村(農民)美術運動とも共通する面も持っている。しかも、農美運動における工芸品の制作は、原則成人男子が中心であったが、この雪おくりは性別を問わず、老若男女誰でも参加可能であった。児童の創造力培養にも資したいという期待もあり、小学校校長らも生徒に発破をかけて創作を勧めていた。また、季節の変わり目という時期が限定されていた点も工芸品制作と

は異なる側面であった。

昭和十一年三月、すでにボンセイヨウベツやユウラップでの熊狩(不発)を終えて帰場した義親は、農場員らが作る雪の「象」を指導して、農場事務所で開催の「雪祭展覧会出品審査」の打ち合わせに臨席するとともに、市内各所で作られた「雪像」の審査に向いていった(昭和二・三・二一⁽⁹⁷⁾)。出品作品は三六点にもほつていた。翌二二日、雪おくり賞品授与式が帝国在郷軍人会八雲分会で開催され、この席上、義親は前述のような雪おくりの趣旨とともに、審査に当たつての注目点を解説した。それは、①郷土色を意識したもの、②雪の特徴を活かしたもの、③創作・創造力が豊かなもの、を特に高く評価したという。⁽⁹⁸⁾ 三六点の作品のうち、一等から四等までの賞を獲得したのは半数の一八点であつたので、一定の盛り上がりを見せたのではないか。一等はスフィックス(八雲小学校尋常六年生)(図12)、二等は釣熊(茂木多喜治・猪子豊)(図13)・座熊(国民学校専修科一年生)(図14)、三等はメメ子(角谷秀雄)・酔客(内田靖夫・岡田利治)・のらくろ(内田栄子・竹内ミヨ・林ヨシ)、四等は熊(中里伊三郎)・フランス女・蛸の八チヤンほか八点であつた。さすがに「熊彫」の本場であるだけに、熊をモチーフにした作品も多い。二等の茂木多喜治や猪子豊、四等の中里伊三郎は八雲農民美術研究会の会員で、熊彫作者としても知られている。⁽⁹⁹⁾ こうしたなかで、顔は似ておらず、「技巧は優れてゐるとは思はれません」⁽¹⁰⁰⁾ と評された小学生作のスフィックスが、創造力の豊かを評価されたのであろう、義親以下審査員の心を捉え、一等賞を獲得したのであつた。あるいは、雪おくりを通じて、「熊彫」とは別の新しい郷土芸術を発掘しようと模索していたのかもしれない(スフィックスは八雲とは全く関係ないが)。

昭和十一年は、雪質不良のため作品の点数はそれほど伸びず、一二点に



図14 座熊
高等国民学校生徒の作品
(八雲写真987)



図13 釣熊
茂木多喜治・猪子豊の作品
(八雲写真989)



図12 スフィンクス
八雲小学校生徒の作品
(八雲写真994)

止まった〔昭和一四・三・三一〕。その後、開催されたという記録は残っていない。戦時色が強まるなかで、この年を最後に自然消滅してしまった可能性が高い。

とはいえ、郷土芸術の追求や、児童の創造力を培養しようとする開催の趣旨は、注目して良いのではなからうか。現在、世界的な観光イベントとなっている「さっぽろ雪まつり」が始まったのが、戦後の昭和二年である。「さっぽろ雪まつり」は、雪との共生や親和性、芸術と技術の追求、冬の観光振興と地域活性化を趣旨とするなど、八雲の「雪おくり」と共通する面も持っている。これを踏まえると、八雲の「雪おくり」は、一過性の行事であったにしても、札幌を始めた北海道各地の雪まつりよりも数十年前い先駆的な試みとして、記憶に留めても良いと思われる。

表1を見ると、義親の来場中の活動として、取りあげなければならない項目も多い。農場主としての「農場視察」の実態⁽¹⁰⁾、移住人で結成された「和合会」への参加⁽¹⁰⁾、節目の年における「記念祭」への臨席など、注目すべき活動も少なくない。「その他」の項目に示した、徳川農場で受け入れていた労働学生との交流(大正二年夏⁽¹²⁾)や、聲啞教育への関与(昭和四年春⁽²¹⁾・同九年春・夏⁽³⁰⁾・32⁽³²⁾・同十三年春⁽³⁹⁾など)、アイヌ文化研究の先駆者であるジョン・バチエラーとの親交についても(昭和二年夏⁽³⁶⁾、同二年夏⁽³⁸⁾、同三年夏⁽⁴⁰⁾)、全く取りあげられなかった。義親は、バチエラーのアイヌ語研究を支援し、バチエラーによる『アイヌ英和辞典』に英文で序文を寄稿している⁽¹⁰⁾。これらについては今後の課題として、まずは表1で概要を示したことで責めを果たしたい。

おわりに

以上、本稿では、明治四二年（一九〇九）における徳川義親の初八雲に関する史料を分析するとともに、大正から昭和戦前期における義親と八雲との関わりについて、検討を加えてきた。併せて、義親の滞雲中に八雲にやって来た人びとも注目し、彼らと義親との交流を踏まえながら、八雲が彼らに何をもたらしたのか注目しながら活動を振り返ってきた。

最後に、義親にとっての八雲とは何であったのか、また反対に八雲にとっての義親の存在意義とは何か、という双方向からの視点でまとめて本稿を締め括りたい。

義親にとって八雲とは、十七代徳川慶勝以来、所有してきた父祖伝来の地という認識が前提にある。近代に入って、近世以来の領知であった尾張国（名古屋）は制度的に関係性は絶たれ、「旧誼」のみしか残らなかったが、八雲は新たに尾張徳川家の所有地となり、徳川家の支援のもと旧藩士族が開墾に尽力し、町づくりを進めていったという厳然とした事実を踏まえる必要がある。旧藩士族が自作農として独立しても、徳川家の所有地は残り、八雲での農場経営は続いていった。

こうした性格の八雲であったからこそ、義親は襲爵早々に訪れて、実見しながら土地の人びととの親交を深めていった。これは旧藩の移住人だけに留まらず、尾張からの移住者やアイヌの人たちも含んでいた。義親は、八雲に住む全ての人々が「同胞」といった感覚で臨んでいたものと思われる。ただ、八雲に対する当初の関心は、自身の生物学研究とも関係しており、文字通りの実験場としての意義を有していたものと想定される。馬鈴

薯研究はもとより、熊狩すらも当初は生物学研究の関心と直結していた。いっぽうで義親が襲爵した頃の八雲は、明治の開墾から半世紀が経とうとしており、先人達の努力もあずかって、町づくりの進展が著しい時期に当たっていた。これが先代義親の時代と決定的に異なる点である。だからこそ義親は、家族・親族や友人らを引き連れて気軽に八雲を訪れることができたのであった。宿泊施設も整備され、年を重ねるごとに自身の研究所に従事する研究者や、政治的・社会的な関係を持った人びとを接待する場としても八雲は機能していった。

八雲が義親の所有であるということは、本人の意識のなかでは義務と責任とがつきまとうということでもあった。義親は、八雲を育てることを自身の課題として受け止め、それは父祖の遺志であるという認識を忘れることはなかった。大正末期から昭和初年にかけての農村疲弊に際しては、時事問題として真正面から向き合い、さまざまな施策を試みている。そのなかには、道内および日本におけるパイオニア的政策も含まれていた。ただし、原則として金銭を投与するのではなく、知恵を授けることで、農民なにし八雲の人びとが自分たちで思考し、立ち上がり、実行していくことに大きな期待を寄せていた。「私は農産物、道路づくりにも、賞を出してなるとか彼ら農民の生きる道をみずから生み出せるよう助力した」と、自ら述べているとおりである。ある意味、義親は、八雲の人びとのモチベーションの維持・向上を図るため、環境整備を進めていたという見方もできる。とりわけ期待していたのは、八雲で暮らす青少年たちであった。青少年の意識を高めるために演説会を開催したり、学校で頻繁に講演したのもその表れであった。ついには、八雲高等国民学校の校長に就任し、生徒たちに発破を掛けて彼らを牽引していった。そのうえで、女性労働者（農村婦

人)に対する視点も持ちあわせていたことも注目できる。総じて、義親にとって八雲とは、理想郷を追究するための壮大な実験場であったといえる。

そして、ここでの実践成果を八雲だけではなく、昭和初期の凶作で困窮する東北地方に還元しようと模索していた⁽¹⁰⁶⁾。まさに、八雲の事例を農村再建のモデルケースの一つとして活用しようとした試みであった。

それでは、八雲にとって徳川義親とは、いかなる存在であったか。それは、何よりも義親が侯爵であり、八雲が徳川侯爵という資産家の華族の土地であったということを前提にする必要がある。八雲は、侯爵の土地であったからこそ話題になり、世間の注目の的となった。地域の人びとは、侯爵義親の興味を惹きながら、来場しやすいような環境整備を進めていった面もあったであろう。義親が来場すること自体が、地域の活性化に結びついていた面も否定することはできない(義親が来場することで、どれだけの金銭が動いたのか、東京徳川邸や徳川農場の支出状況を検討するのは、今後の課題としたい)。その義親は、侯爵であるからといって、上から目線で地域の人びとに対していたのではなく、常に庶民的・平民的な態度で接していた。義親自身も、侯爵だからと言って住民たちに過度な気遣いを要求しなかった。こうした義親自身の個性も大きな話題となり、新聞報道などを通じて八雲はますます注目度を増していった。

困難に直面した八雲町が、頼みの綱として義親の支援を求めることもあり(八雲中学校開校に当たって、義親に資金援助を求めたのはその最たる例である⁽¹⁰⁸⁾)、困った時の徳川頼みが全くなかったとは言えない。ある意味で、八雲は徳川なくして発展することはなかったといえようが、一方で、義親にとって八雲は、学究活動の場にして、遊興かつ接待の場、さらには農村復興・国

家興隆のモデルケースともなるべき理想郷追求の場でもあったので、相互依存の関係にあったことは、先にも見たとおりである。冒頭に示した、昭和四一年建設の「徳川さん」の胸像は、義親と八雲町との関係性を象徴的に物語るものであった。

他方、尾張徳川家の旧領知であった名古屋は、「旧誼」を残しつつも、徳川がなくても近代都市として変貌を遂げていったことは歴史が証明している。八雲で結成された旧藩士の親睦会は、名古屋では結局つくられなかった(ただし、単発的な例はいくつか散見される。その他、在京尾張出身者有志による「愛知社」が創立され、資力に乏しい尾張出身学生に対して資金援助がなされることはあった⁽¹⁰⁹⁾)。多様な家臣を擁した尾張藩は、意識も多様で共通の利害でまとめることは難しかったことをうかがわせる(この点八雲の場合、移住人の人数も限定され、利害関係も共通しており結びつきやすい面もあった)。こうした地域的特性を持った名古屋に対し、義親がどう向き合ったのか。八雲と比較しながら検討することも今後の課題である。

註

- (1) 『三訂 八雲町史』上・下巻(八雲町、二〇一三年)、林善茂「徳川農場発達史」
- (2) (三)『北海道大学『経済学研究』五・六・一三号、一九五三・五四・五八年)。華族農場とは、明治・大正期に華族が資本を投資して経営した大規模農場のことで、「皇室の藩屏」である華族の経済基盤を強固にするため、政府が官有地を無償ないし低価格で払い下げたことから誕生をみた。北海道や栃木県那須野が原に設けられた農場が有名で、旗手勲『日本における大農場の生成と展開』(御茶の水書房、一九六三年)は、北海道の蜂須賀農場を取りあげ、土地所有のあり方や経営の変遷を検討した。小作制農場としての蜂須賀農場は、小作争議が激しかった農場として著名である。本稿で対象とする徳川農場も小作経営を導入していたが、対照的に小作争議は全くなかった。この点に関しては、藤田英昭「大

正・昭和初期における徳川農場の理念と実践(徳川林政史研究所『研究紀要』四七号、二〇一三年)を参照のこと。

(2) 「和合会」については、『和合会百周年記念 改訂 和合会史』(和合会、二〇一五年)参照。

(3) 徳川義親「農村の自力更生―八雲町に於けるその一例」(『明倫』一卷三三号、明倫会、一九三三年)。以下、傍線や傍点、カッコ内の註記は引用者による。引用中にある説点も適宜付け、旧字体は新字体に直した。

(4) 同「八雲―旧尾張藩士による北海道開拓の足跡」(『おりべ』四号、大東紡績株式会社名古屋工場文化部、一九五五年)。

(5) 同「私の履歴書」(日本経済新聞社編集・発行『私の履歴書』第二十集、一九六四年)。

(6) 八雲は米作には不向きな土地柄とみて酪農を導入したり、トラクターを購入して農村の機械化を試みた。また、農民生活の改善のために、副業としての美術工芸品の制作やホームスパン(手織りの毛織物)を奨励し、煉瓦造り住宅への改良を提唱した。八雲中学校開校のための資金援助や、実業学校(八雲高等国民学校)の校長に就任するなど、八雲町の依頼にも応じていた。以上は、註(1)前掲『三訂八雲町史』、註(2)同『和合会史』、林善茂「徳川義親」(北海道新聞社編集・発行『北海道大百科事典』下巻、一九八一年、二〇二頁)参照。

(7) 徳川農場は、八雲農場・野田生農場・ユウラップ農場・八雲山林・野田生山林・大野山林を総称した農場のことで、明治四五年に開設された華族農場である。山林と一部の農場は直営で、各農場に多くの小作人を抱えていた。八雲農場を本場とし、ここに事務所が置かれていた。ここでいう徳川農場の「日誌」とは、八雲農場の庶務係によって付けられていたもので、明治四五年から昭和二十一年(一九四六)度までの分が残されている(八雲三三九、三六四、徳川林政史研究所所蔵。以下、史料の所蔵先が同研究所の場合は、史料番号のみを記し、所蔵先を省略する)。

(8) 徳川一遊子「騎馬紀行」(学習院『輔仁会雑誌』七九・八〇号、一九〇九年)。徳川義親「たびだち」(『明倫』一五号、私立明倫中学校校友会、一九〇九年)。標題は異なるがともに同じ文章が掲載されている。この時の北海道旅行について

は、註(5)前掲書、一五七―一五八頁にも記載があり、汽車も通っていないなかで「羊蹄山、洞爺湖、襟裳岬を回り、釧路に出、それから屈斜路、阿寒を経て網走に抜けた」と記述されているが、八雲の話は登場しない。しかし、この時の北海道旅行で「ほんとうの北海道を見ることができた」(註(5)一五八頁)と断言することく、北海道の実態を自らの眼に焼き付けることができた。それは、後述するこの時の八雲での濃密な体験を見てもうかがえる。

(9) 松平錦之丞「北海の旅」(学習院『輔仁会雑誌』六七号、一九〇五年)。義親は越前松平家の出身で父は松平慶永。錦之丞は幼名。

(10) 註(8)前掲「たびだち」より引用。

(11) 「明治四十二年度日誌」(八雲三二六)。

(12) 書簡は「大野農場建物調書」(八雲二八七)に綴り込まれている。

(13) 前同「大野農場建物調書」所収東京家職宛て書簡。以下、註記がない記述は、本書簡による。

(14) 米寿の鷺ノ巣編集委員会編『米寿の鷺ノ巣』(鷺ノ巣農業協同組合、一九七〇年)。

(15) 大島日出生「青年舎」(八雲書房、一九八三年)。大島日出生は鍛の甥。

(16) 樋田惣助は、愛知県中島郡祖父江(現・愛知県稲沢市)から明治二二年に渡道、鷺の巣に入植し牧場を経営した人物である。明治四四年の皇太子(のちの大正天皇)行啓に際して、八雲駅で優良牝馬三九頭が台覧に供されたが、このうち二頭の霞号・西陳号が樋田惣助の所有であった。また樋田と鶴飼直十郎とが共同で飼育した牝馬アルジェ号は、北海道産牛馬連合会の選により「八雲号」と改称して皇太子に献上されたことでも知られる(鷺ノ巣農業協同組合企画・発行『鷺ノ巣農場開拓120年記念誌』二〇〇一年、二二・五〇・八七・一九〇頁。『八雲町史』八雲町役場、一九五七年、三、四頁。註(1)前掲『三訂八雲町史』上巻、四六三、四六六頁)。大正二二年(一九三三)九月二一日に死去した(大正十二年度日誌)八雲三四〇)。

(17) 狩猟民であるアイヌにとって、熊は猛獣ではなく野放しの「家畜」に近い動物であった。人を傷付ける熊は「魔物に憑かれた」もので、他は肉を土産に持って人間界に遊びに来る、尊い客(神)と考えられていた。したがって、熊は敬意と

親愛の対象であり、殊に仔熊を捕らえた場合は、神から授かったものとして、女たちが授乳をしたり、粥を与えたりして大切に育てられた。生長すると檻に入れられ、早ければその年、遅くとも三年目に熊祭(仔熊の送りをイヨマンテという)を行った。熊祭は獲物が豊かであること(熊の再来)を祈願して、熊を神の国へと送り還す儀式で規模はさまざまにあり、イヨマンテは古老の指揮に従って厳格なしきたりのもとで執行された。以上は、更科源蔵『熊祭』(北方文化写真シリーズ・I、検書房、一九五五年)、萩中美枝『熊まつり』(註(6)前掲『北海道大百科事典』上巻、一九八一年)参照。

(18) 移住人である角田弟彦の「胆振日記」(八雲四一八)によると、この日は一〇余人の来場者があったというから(明治四十二年七月六日条)、招待者のほとんどが来場したことになる。

(19) 「八雲村沿革」(八雲四五二)。野田生開拓百年記念誌編『野田生百年』(野田生開拓百年記念事業協賛会、一九八八年)参照。

(20) 河原友二は、尾張国東春日井郡和爾良村(現・愛知県春日井市)の出身。明治二五年に家族六人で野田生に入植した。柏木部落開拓の始祖に当たる。澱粉製造や牛馬の増殖に努める傍ら、子弟教育のための教育所の設置を提唱し、簡易教育所の設立にこぎ着けた。昭和一八年(一九四三)死去。寿太郎は明治二五年に柏木で出生、篤農家として知られる(註(19)前掲『野田生百年』一〇九頁)。

(21) 註(1)前掲『三訂八雲町史』下巻、三〇四―三〇五頁。

(22) 長屋商店は長屋有二の商店と思われる。長屋有二は、明治八年に尾張国愛知郡広井村(現・名古屋市中村区)に出生、同一九年に東京に出て商業を習い、二五年に渡道、徳川家開墾場の用度部に入り野田生の同用度部、八雲商会野田生支店に務め、野田生支店閉鎖後は自営業に転じた。村会議員・学務委員・火災予防組合長なども歴任(註(19)前掲『野田生百年』一一二頁)。

(23) 鈴木重助は東春日井郡楽田村(現・愛知県犬山市)出身、明治三十三年に入植した。息子秀明は農業・澱粉製造を営み、産馬を副業として種馬場を経営した(前同、一〇九頁)。

(24) 註(1)前掲『三訂八雲町史』上巻、七三〇―七三六頁。

(25) 註(11)前掲『明治四十二年度日誌』七月三二日条。

北海道八雲における侯爵徳川義親とその周辺

(26) 註(1)前掲林善茂「徳川農場発達史(二三)」。大正三年(一九一四)以降、第一次世界大戦の影響による木材価格の高騰により、山林事業は活況を呈した。これ以降、徳川農場は、農場収支の赤字を山林収入でバランスを取るようになっていった。

(27) 「大正四年日誌」八月四日条(八雲三三三)。以下、徳川農場「日誌」を典拠とする場合は、本文中に「大正四・八・四」のように「(和暦・月・日)」を表記して註記を省略する。

(28) 馬鈴薯について付言すると、地理的要因もあり、かつては春夏冷涼で海霧がかかる八雲の気候は、地上に実る穀物には向かず、地中にできる馬鈴薯栽培に適していた。義親も各種新聞の投書や随筆等で、農業は全国一律に実施するのではなく、地域の事情に則すべきとして、八雲に馬鈴薯栽培を奨励している。その甲斐もあって、明治後期から大正期にかけての八雲は、馬鈴薯を原料とする澱粉製造が盛んとなり、八雲の片栗粉が東京市場において全国一位の高値で取引されるようになった。本文にあるように、馬鈴薯疫病が流行すると品種改良が進められ、男爵薯を主要品種とする種子用馬鈴薯栽培を展開していった(註(1)前掲『三訂八雲町史』上巻、一二頁、四五四―四六〇頁)。

(29) この頃、義親は馬鈴薯の伝染病に関する研究を進めていた。大正六年八月四日『都新聞』によると「旧尾張の殿様徳川義親氏は、目下麻布の本邸に閉ぢ籠つて、侯爵の好きな植物学の研究に余念なく、ピンセットや顕微鏡を友として勉強して居るが、目下は馬鈴薯の伝染病に就いて研究の歩を進め、最近其論文起草に取り蒐つて居る」とある。

(30) 角田弟彦「胆振日記」大正四年八月一〇日条(八雲四二四)にも関連記事が出てくる。その後、義親の行動を受けてか、八雲移住人らを中心に「角田翁同情会」が大正五年に組織され、その会費(一口につき毎月金一〇銭)が弟彦の生活費や臨時病氣等の手当てに充当されていた。会員は八雲のみならず、広く名古屋・大阪にも及び総数九二名。名古屋の実業家岡谷惣助や豪商関戸守彦らも含まれていた(大島日出生「開拓の歌人 角田弟彦翁の生涯(後編)」『ゆうらふ』二二号、八雲郷土研究会、一九八五年)。

(31) 八雲競馬場は、徳川家開墾地から用地四町三反歩の無償譲渡を受けて開設さ

れ、明治四四年八月に第一回競馬会が開催されていた。その後、開墾五十周年事業の一環で、徳川農場の支援を受けて山越郡畜牛馬産組合が東雲町に競馬場を新設し、義親も八雲に來場した際に新競馬場を視察するなどしている（昭和二・八・九）。八雲競馬が地方競馬に公認されて以降、優勝馬には義親から優勝銀カップが授与された（昭和六・六・九など）（註（一）前掲『三訂八雲町史』上巻、四六七～四六八頁）。

(32) 徳川義親「北千島紀行」〔同〕熊狩の旅、精華書院、一九二二年所収は、この時の紀行文である。

(33) 徳川義親『最後の殿様』講談社、一九七三年、八九～九二頁。

(34) 同右、三六～三七頁。

(35) 加藤英夫・山田鐸一・永井致『尾張徳川家啓明寮』啓明寮生一同、一九八六年、一六・三七頁。

(36) 『地球』一三卷四号（京都帝国大学地球学団、一九三五年）。

(37) 大正七年春【2】に來場した柳田一郎も、毛利家時習舎の同窓で義親の友人である。柳田は北海道根室の実業家・資産家。この年、義親の熊狩に随行した大正七年三月一日『報知新聞』。

(38) 横田順彌『明治パンカラ快人伝』ちくま文庫、筑摩書房、一九九六年。

(39) 註(33)前掲『最後の殿様』七八頁。

(40) 徳川農場の住宅改良事業によつて建設されたベチカ付のコンクリート壁小屋のこと。大正一一年、欧州旅行に出かけた義親が、外遊先で農家の住まいを実見して八雲に導入したものである。帰国後の同一二年九月に建設に着手し、一月に完成した（大正一二・九・六～同・一二・一四）。

(41) 大正期に義親の自邸内に創設された徳川林政史研究室は、昭和六年の財団設立とともに蓬左文庫附属歴史研究室となり、同じく財団に所属した豊島区目白町の徳川生物学研究所の二階に拠点を構えた。戦前は「研究室」で、戦後に「研究所」となった。以上は、藤田英昭「侯爵徳川義親と徳川林政史研究所」（徳川林政史研究所『研究紀要』五七号、『金鯉叢書』五〇輯所収、二〇二三年）参照。以下、林政史研究室（研究所）に関して特に註記がない場合は、本拙稿による。

(42) 立石の研究成果に、「旧尾州家蔵本河内本源氏物語について」（『国語国文』四

一四、一九三四年）、「蓬左文庫と河内本源氏物語」（『読書春秋』三一八、一九五二年）がある。その他、「木曾の棧」（『信濃教育』五六一、一九三三年）、「武女のこと」（『典籍』八、一九五三年）なども発表している。国文学者の山岸徳平は、「立石さんが、林政史研究室に、古文書などを披閲して居られる時は、時代の「さび」とか「匂ひ」の中にひたつて、浮世離れでもした人かのように見えるが、新しい、熱のある歌を詠み、又鋭い理論を吐かれる時には、歌人でもあり、文明批評家でもある」と彼女を評した（立石百合子『花いける』表現社、一九三七年）。

(43) 徳川生物学研究所については、田宮博・小倉安之・柴田和雄・高宮篤・長谷栄二・柳田友道『徳研盛衰記―田宮博氏に聴く徳川生物学研究所座談会』（『自然』二五卷九号、中央公論社、一九七〇年）がある。

(44) 『科学朝日』編『殿様生物学の系譜』（朝日新聞社、一九九一年、一九四～一九五頁）。

(45) 戦前の生物学研究所の一端を示す文献に、中村輝子・増田芳雄「山口清三郎博士の戦中日記」（『人間環境科学』五卷、一九九六年）もある。

(46) とりわけ著名なのは、服部の後任となった田宮博で、田宮のクロレラ大量培養の研究は、戦後の食糧難のなか「クロレラで世界の食糧問題解決に一役」とか、「国土の狭い日本ではおあつらえ向き、タンパク不足これで解決」などと話題となり、生物学研究所を「クロレラの研究所」として世に知らしめた（昭和四五年四月二四日『毎日新聞』）。

(47) 『徳川生物学研究所要覧』（財団法人尾張徳川黎明会 徳川生物学研究所、一九三五年）。

(48) 註(33)前掲『最後の殿様』七六頁。

(49) 「重要事項録」（尾七一）。

(50) 註(16)前掲『八雲町史』五頁。

(51) 徳川義親「北白川宮殿下を偲びまつりて」（大正一二二年四月六日『報知新聞』）。

(52) 「真萩館書類」（八雲六四四）。以下、特に註記がない場合は、本史料による。

(53) 服部正定は、前年大正一三年に、開墾当初の状況を絵と文とで示した「八雲

村創業餘談」を編集している(絵と文は十倉寒山による。八雲町指定文化財。註

(1) 前掲『三訂八雲町史』上巻、口絵掲載。あるいはこの絵に描かれた内容を「昔物語」として語った可能性はあろう。「八雲村創業餘談」については、幸村恒夫「八雲村創業餘談」(大)を読んでみる(『八重垣』七〇号、二〇二三年)もあり、現在連載中。この絵には、名古屋から来て、経験のない「カンジキ」を履いての雪中歩行や森林伐採の苦勞、食料はあっても薪の用意がなく、生木をくべて火起こしするも煙ばかりで眼をいためたエピソードなどが記されている。

(54) 恒徳王の趣味のひとつに登山があった(竹田恒徳「雲の上、下思い出話」東京新聞出版局、一九八七年)。旅行中のプランは義親が考えていたよう(註(52)前掲「真萩館書類」、恒徳王の趣味を踏まえて登山を計画した可能性がある。

(55) 永久王はテニスが得意であった。陸軍幼年学校当時からテニスに長じ、教官相手に鮮やかなフォームでサーブを入れるため、教官は驚嘆していたという。その他、相撲・柔道・剣道・游泳・スキー・スケート・撞球・ゴルフ等あらゆるスポーツに精通していた(中島武「北白川宮永久王殿下」清水書房、一九四二年)。永久王は、昭和一五年に駐蒙軍として出征したが、演習中に不時着してきた戦闘機に接触し重症を負い、この年薨去(三〇歳)。

(56) 田中親美は古筆研究家で復古大和絵の第一人者、尾張徳川家伝来の「源氏物語絵巻」の模写を制作した。森川は旧尾張藩士で茶人。

(57) 原史彦「尾張徳川家と徳川美術館」(徳川美術館編『徳川美術館展 尾張徳川家の至宝』中日新聞社、二〇一三年)。

(58) 香山里絵「尾張徳川家麻布富士見町邸(下)」(『金鯢叢書』四九輯、二〇二二年)。

(59) 徳川義親「親友大川君のこと」(『新勢力』二二号・大川周明特集号、一九五八年)。小田部雄次『徳川義親の十五年戦争』青木書店、一九八八年)、六六―六九頁。

(60) 昭和一五年二月一六日『大阪朝日新聞』。

(61) 註(1)前掲『三訂八雲町史』下巻には、日露戦争から太平洋戦争において戦死・戦病死した八雲町出身軍人の芳名が記載されているので(七七三―七七九三頁)、この時慰問した遺族も推察できる。

北海道八雲における侯爵徳川義親とその周辺

(62) 弟喜久雄はヴァイオリン演奏以外に、鈴木バイオリン東京支店に勤務し、楽器研究にも勤しんだという(久保絵里麻「鈴木鎮一と才能教育―その形成史と本質の解明」明治学院大学大学院文学研究科提出博士論文、二〇一三年)。

(63) 徳川義親「熊をたづねて」(註(32)前掲『熊狩の旅』二五六頁)。

(64) 義親は、昭和一三年に国民の礼法を制定する文部省の「作法教授要項調査委員会」の委員長を委嘱され、『日常礼法の心得』(実業之日本社、一九三九年)を出版した。義親の礼法は、伝統的な形式主義にとられず、誰もが日常生活に取り入れられるもので、こうした礼法を山脇高等女学校ほか十文字高等女学校、愛知県女子師範学校などで教授し、各種講演でも普及していた。徳川黎明会が昭和一七年に複製刊行した『徳川禮典録』も、義親の礼法教育活動の一環で実施されたものと想定される。義親の礼法に関しては、『日常礼法の心得』の戦後版ともいえる『とくがわエチケツト教室』(黎明書房、一九五九年)を復刻した、『徳川家当主に学ぶほんとうの礼儀作法』(祥伝社、二〇一六年)もある。

(65) 註(35)前掲書。以下、啓明寮に関して註記がない場合は、本書による。

(66) 後藤南「啓明寮の恵まれた日々を想う」(註(35)前掲書所収)。

(67) 大正一四年八月『北海タイムス』。

(68) 徳川義親「熊狩の話」(日本放送協会関東支部編『ラヂオ講演趣味講座』第二巻、博文館、一九二八年)。

(69) 太田尚宏「徳川義親の熊狩と八雲『熊彫』の誕生」(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編集・発行『アイヌ―美を求める心』二〇一〇年)にも、別の史料に基づいた同様の説明がある。

(70) 岡本一平「殿様の熊狩」(同『二平全集』先進社、一九二九年)、四六―五二頁。

(71) 大正七年三月八日『東京日日新聞』。

(72) 大正七年の熊狩では、実際に牡熊一頭を捕獲した。その後の様子は、農場「日誌」三月二日条に以下のように記される。「毛皮ハ頗ル上等品ナリト云フ、午後土人等之ヲ皮剥キ、其肉ト骨トヲ解体ス、都築氏其内臓ノ一部ヲ亜爾簡児(アルコール)ニ浸漬シタリ、今晚熊祭ヲ遊楽部海浜土人部落ニ執行」。エチゴウサギを捕獲したという記事はない。

(73) 大正七年三月九日『報知新聞』。

(74) 義親は、生物学研究所の設立理由について、「まア一口にいへば、遺伝に関するものです」と言い切り、当時米国で研究が盛んな「人種改善」に関心を持っていたようである。大正五年二月二七日、名古屋で開催された「史蹟保存講演会」において、義親は「人種改善字に就て」という演題で講演している（大正五年二月二八日『名古屋新聞』）。この講演は、『史蹟名勝天然紀念物 保存協会第五回報告』一九二七年において活字化されている。

(75) 徳川義親「狩猟冷熱」『文藝春秋』一〇年六号、一九三二年。

(76) 義親の熊狩は、各種新聞にも掲載されたため、大きな話題となるが、八雲以外の地へ熊狩に出向くことは、埼玉県秩父以外にはなかったようである。秩父の場合は、「土地の宣伝の、い、ダシになりに行くのですヨ」（大正一四年一二月二〇日『東京日日新聞』・同月二四日『前同』）。と、地元の話づくりに付き合つてのことだと放言していた（結局獲物はなし）。

(77) 「講演録 真萩講演会」（八雲六四五）。第二回の白戸八郎は、日本メソジスト教会札幌教会の牧師。大島鍛はじめ徳川農場の関係者には、クリスチャンが多いのでその関係から。石川三四郎（第三回）・吉岡信敬（第四回）・大町文衛（第二二回、生物学研究所）は前述した。第六回の今井時郎は、社会学者で東京帝国大学文学部助教授。徳川義寛三兄弟が来場した際に同行している。義寛が東京帝大文学部出身であったことと関係があるか。第一四回の櫻井鐮三は参謀本部に所属する陸軍少佐。愛知県出身で、父は明治期に八雲小学校で教師を務め、大正期に徳川家の家扶となった櫻井武愷。来場を機に由緒を以て講演会が開催されたものと思われる。その他の人物は文中で述べた。

(78) 徳川農場では、女性労働服として、①激しい作業に堪えうる能率的なもの、②廉価で丈夫、かつ美しく文化的なもの、③冬暖かで夏涼しい衛生的なもの、とかなり厳しい条件をつけて模索・検討していたが、講習会を通じて何らかのヒントを得ようとしたものであろう。結局、自由学園の講師が考案・準備してきた婦人服の見本が「オーバーオール」であったこと、そして、義親が生物学研究所の婦人助手達は全員「オーバーオール」型のズボンを用い、上着はシャツ一枚で仕事をしていると推奨したことなどによって、最終的に男性用「オーバーオール」

の色と型を改良して、そのまま婦人労働服にすることに落ち着いた。この成果は、農場パンフレット第一輯『農村婦人労働服の研究』（昭和八年八月一八日発行）にまとめられ、各地に頒布されていた（『婦人労働服書類』八雲三五〇八）。検討していた課題が講習会を契機に進展し、決着した事例として指摘しておきたい。

(79) 山本真理・三橋俊雄・宮崎清「山本鼎の日本農民美術運動」（『デザイン学研究』Vol. 42・No. 2、一九九五年）。

(80) 註（5）前掲「私の履歴書」。以下、八雲におけるいわゆる農村美術運動に関する記述は、大石勇「伝統工芸の創生―北海道八雲町の「熊彫」と徳川義親―」（吉川弘文館、一九九四年）、香山里絵「徳川義親と木彫りの熊」（上原敏編『熊彫』凹プレス＋エルビスプレス、二〇一七年）、大谷茂之「八雲における木彫り熊の歴史」（前同）、註（69）太田前掲論文を参照。

(81) 註（80）大石前掲書、一七頁。

(82) 註（79）山本ほか前掲論文。

(83) 大谷茂之「木彫りとなったヒグマ」増田隆一編『ヒグマ学への招待』北海道大学出版会、二〇二〇年。

(84) 徳川義親「偶感二則」（八雲中学校「校友会誌」創刊号、八雲中学校々友会図書部、一九二五年）。

(85) 大正七年八月二六日には、義親の主催により真萩館で「青年演説会」が開催された。この時の「弁士」と「演題」は以下の通りである。

開会の辞（大島鍛、国家と農業（藤田長助）、大正農家青年ノ覚悟（森勝）、理想郷何処にありや（真野萬機）、鷲之果青年会の記念事業に就て（志水松三郎）、光輝ある生涯（服部久三郎）、青年ノ指導ハ如何ニスヘキヤ（真野鉦之輔）、犠牲ノ建設物（幡野直次）、題不知（小室英夫）、北海道に於ける八雲の位置と将来の希望（内田文三郎）、所感（侯爵）

これらは徳川農場員や町有識者、小作人らによる演説で、青年をテーマにした内容であったことがわかる。集会者は五〇名と盛会であった。

(86) 徳川義親「農村更生の第一歩」（『農村計画』第二巻第七号、一九三三年）。

(87) 大正九年七月二日『函館毎日新聞』。

(88) 大正九年七月二六日『函館毎日新聞』。「授賞人名録 水上大運動会」（八雲三

四九八、「競技及賞品」(前同)。

(89) 同右。

(90) 椎久年蔵(トイタレキ)は、ユウラップ・アイヌの世話役として生活の近代化にも尽力、言語学や民族学分野では渡島半島随一の伝承者として知られていた。こうした背景の一端として義親との交流があったと考えられている(学習院大学史料館編集・発行『徳川義親侯とユウラップ・アイヌ』一九九七年)。なお、ユウラップ・アイヌとは、遊楽部川口にコタン(村落)を営んでいたアイヌの呼び名を指し、早くから和人と交流を持っていた。

(91) 横山健堂『日本相撲史』(富山房、一九四三年)、三八四〜三八五頁。

(92) 義親が提唱した農村美術工芸品評会では、木工細工品や藻細工品、木彫品、刺繍品など広く農民が制作した民芸品を扱っていたが、出品・展示・審査を重ねるごとに、「熊」の「木彫品」に注目が集まり、地域の産業化に繋げることが模索されていった。折しも昭和三年は、尾張旧藩士族が移住して五〇年目に当たっていたことから、徳川農場は、「木彫り熊」に特化した「八雲開墾五十年記念熊彫展覧会」を企画した。多くの農村美術工芸品から「熊彫」が選定されたのは、八雲開墾を始めた徳川家への思い、義親の「熊狩」に因むこと、義親が提唱した農村美術運動への感謝、によるものといわれる(註(69)太田前掲論文)。

(93) 大谷茂之・香山里絵「北海道八雲町における木彫り熊の導入と普及 農民美術運動との関係を中心に」『金鯢叢書』五三輯、二〇二六年。

(94) 義親は、八雲に出向く直前の昭和十一年二月二五日、東京で大雪が降った際に、研究所で「雪の裸女像」と「象」を所員みなで作っていた徳川義親「雪おくり」(同『きのふの夢』那珂書店、一九四二年、二二〇〜二二二頁)。註(59)小田部前掲書、八二頁。その直後に八雲で雪祭りをおこなったのは、この記憶も作用していたに違いない(雪の像を作った翌二六日、二・二六事件が勃発する)。

(95) 昭和十一年三月一五日『八雲新報』。

(96) 註(94)前掲「雪おくり」二二二頁。

(97) 審査員は、ほかに松田武策、與世里盛喜、十倉金之、福田長市の四氏がいた(昭和十一年三月二五日『八雲新報』)。

(98) 昭和十一年三月二五日『八雲新報』。

北海道八雲における侯爵徳川義親とその周辺

(99) 註(80)前掲「熊彫」。

(100) 註(97)前掲「八雲新報」。

(101) <https://www.snowfics.com/about/history/>

(102) 義親は単に遊興のために来場するだけではなく、折に触れて農場経営法について場長と相談を持ちたり(「大正二・三・三三」、時には「今後或る程度迄緊縮方針にて、消極的に進むべく論ず」(「大正一四・七・三〇」とあるように、状況を捉えて進むべき方針を示したりしていた)。

(103) 和合会員との交流については、文中各所に記してきたが、春期・秋期に真萩館で開催された親睦会への臨席については触れてこなかった。表1から読み取れることは、大正から昭和初期にかけての義親は、原則として春期の親睦会に参加しており、昭和九年以降は春秋ともに参加するようになるということである。昭和二年には、翌年の五十年祭に関する私見を述べるとともに、「青年和合会」に関する希望も述べている。これまで当主のみで構成されていた和合会員を、青年・子供の世代にまで広げて会員の拡大を目指すとともに、青年の独自性を謳ったものと想定される。青少年に対する義親の期待とも結びつく構想といえる。

(104) ジョン・バチエラー『アイヌ英和辞典』(教文館、一九二六年)。

(105) 註(5)前掲書、一六一頁。

(106) 徳川農場から太田正治・都築重雄・茂木和夫の三青年が、岩手県の遠野地方を訪れ、農村の実情を視察した報告書『北海道農民の見た凶作地』をまとめ、それをもとにした座談会を東京で開催するなどして対応を協議した(大石勇「昭和恐慌と凶作の東北農村」、徳川林政史研究所『研究紀要』三三二号、一九九八年)。

(107) 大正・昭和初期の尾張徳川家は、関東大震災や十五銀行の破綻による被害を最小限にとどめ、他の華族にくらべて世襲財産の減少がなかった。財政改革も成功させて、収入を増加させていた(小田部雄次「一九二〇年代における華族世襲財産の変様」『日本史研究』二八八、一九八六年)。そのため、徳川農場を経営し、八雲を育成する余裕があったといえる。

(108) 註(1)前掲『三訂八雲町史』下巻、四二八〜四三〇頁。註(2)前掲『和合会史』一〇四〜一〇六頁。

(109) 「愛知社創立六十年史」(『郷土文化』四四巻二号、名古屋郷土文化会発行、一

九八九年）。愛知県育英会寮史編纂委員会編『愛知学生会館 百四十年史』公益財団法人愛知県育英会、二〇二一年）。

（110）徳川林政史研究所編集・発行『尾張家臣団』（二〇二五年）。